

2015 年度京都大学 11 月祭研究報告

「視覚障害とスポーツ」

京都大学点訳サークル

多胡優作 田中心 豊福美和子 渡邊賢史 服部航史
山根匠 潮芽衣 清水大祐 溝口瑛紀 田口麻人

まえがき

京都大学点訳サークルは、週に一度の活動で点訳、すなわち普通の文字を視覚障害者が読めるよう、点字に訳す活動を行っています。この種のボランティア活動は一般に「情報保障」と呼ばれ、視覚障害者の生活サポートに貢献しています。そして例年11月祭においては、こうした通例の情報保障の取り組みを生かしながらも、普段は触れることのない視覚障害の側面にアプローチする機会を設けています。それがこの研究報告です。

今年度の研究テーマは「視覚障害とスポーツ」です。皆さんは「障害者スポーツ」と聞いて、どのようなイメージを抱くでしょうか。今では様々な障害者スポーツでワールドクラスの活躍を見せる日本人選手が数多くいます。来る2020年には東京でオリンピック・パラリンピックが開催され、選手たちのメダル獲得も期待されています。こうした現状を踏まえると、障害者スポーツに少なくない関心が寄せられていると言えるでしょう。

しかし実際のところ、我が国における障害者スポーツに対する理解は、決して深いものではありません。オリンピックの個々の競技名やルール、メダリストについて詳しく語れる人はいても、それと同程度のことをパラリンピックに関して語れる人は、ほとんどいないのではないのでしょうか。ましてやそれを視覚障害に限定するとなれば、なおさらです。

私たちはスポーツと無関係に生きることはできません。実際にプレーするだけでなく、観戦したり、あるいは歩いたり走ったりといった日常的な運動にまで拡張すれば、スポーツは当たり前の存在として私たちの身近にあります。その当たり前と視覚障害との関係を多面的に検討し、理解を深めることが本研究の目的です。そのために各会員が各自の興味に即した小テーマを選択し、調査を進めるという方法を採用しました。初めは競技種目に対する表面的な把握に終わってしまうのではないかと懸念されましたが、結果的には共時的・通時的といった枠組みに囚われない有意義な研究が完成したと自負しています。読者の皆さんが、本研究を通して視覚障害者スポーツに対して更なる関心を持たれるようなことがあれば、望外の喜びです。

最後になりましたが、本研究の完成は、会員の取材に快く応じてくださった視覚障害者スポーツ関係者の方々のご協力なくしては有りえないものであったことを記します。ここに心からの感謝の意を表す次第です。

京都大学点訳サークル 2015 年度会長

山根 匠

目次

ブラインドサッカーについて	1
視覚障害者柔道	6
グランドソフトボール	8
フロアバレーボールについて	14
ゴールボール	22
視覚障害と体育教育：1878-1925	42
視覚障害者スポーツにおけるクラス分け	52
視覚障害者スポーツの歴史と今	57

ブラインドサッカーについて

多胡 優作

1. はじめに

今年はリオデジャネイロパラリンピックに向けた予選大会が開催されていたこともあり、ブラインドサッカー（視覚障害者サッカー）の名前をニュースで聞いた人も多かったかもしれません。「目の見えない人がどうやってサッカーをするのか?」。誰しも最初はそう思うでしょうが、ブラインドサッカーは他の多くの視覚障害者球技と違い、選手と選手が激しくぶつかり合うアグレッシブでスリリングなスポーツです。ぜひ、この機会に興味を持ってみてください。

日本ブラインドサッカー協会のホームページでは、次のような文章が載せられています。

「ブラインドサッカーは自由をくれるスポーツだ」
ブラインドサッカーについて問われると、選手達は異口同音にそう答えます。

これまでの視覚障がい者スポーツでは、視覚障害の度合いが重いほど（視力が弱いほど）、動く範囲を限定し、味方や相手と接触することがないように安全性が配慮されていました。

しかし、ブラインドサッカーでは、選手は自分の考えで判断し、ピッチを自由に駆け巡ることができます。ブラインドサッカーは、視覚障がい者が日常では感じる事が難しい「動くことの自由とその喜び」を感じる機会を生み出し、彼らが一層の充実感を持った生活を送れることを実現します。

一つのスポーツとして大きな魅力を持つブラインドサッカーに、ひとりでも多くの人が興味を持つようになることを願います。

2. 「ブラインドサッカー」と「ロービジョンフットサル」

視覚障害者サッカーには、参加選手の視覚障害の程度によって二種類の競技形態があり、それぞれルールに差異があります。まず、ゴールキーパー以外の4人のフィールドプレイヤーは、視覚障害の程度によって次の3つのクラスに分けられますが、

B1・全盲またはほぼ全盲・光を全く感じないか、光を感じても手の影を認識できない。

B2・弱視・手の影が認識でき、矯正後の視力が **0.03** 未満、または視野が **5** 度未満。

B3・弱視・矯正後の視力が **0.03** から **0.1**、または視野が **5** 度から **20** 度まで。

このうち、**B1** の選手をフィールドプレイヤーとするものを特に「ブラインドサッカー(**B1** クラス)」と呼び、**B2・B3** の選手で構成されるものは「ロービジョンフットサル(**B2/B3** クラス)」と呼ばれます。ブラインドサッカーは、アイマスクをつけて完全に視力を奪われた状態で音のなるボールを用いてプレーをしますが、ロービジョンフットサルは、「弱視」とされる選手が弱視状態のまま、通常のフットサルボールを用いて5人制フットサルのルールに準じた形でプレーをします。障がいの程度によって見え方の異なる選手同士がプレーする難しさがありますが、その難しさはチームメイトをよく理解する必要を生み出すという魅力であると言われます。

本稿では特に **B1** クラスのブラインドサッカーを取り上げます。

3. ブラインドサッカーの特徴

まず、普通のフットサルとは異なる大きな特徴として以下の5つが挙げられます。

・音の出るボール

ボールは、フットサルボールと同じ大きさです。ボールは転がると音が出る特別なボールを使用します。全盲の選手たちもボールの位置や転がり分かります。

・「ボイ！」の掛け声

フィールドプレイヤーはボールを持った相手に向かって行く時に、「ボイ！」と声を出さなければなりません。「ボイ (Voy)」とはスペイン語で「行く」という意味で、選手の存在を知らせ、危険な衝突を避けるためのルールです。これを行わないとノースピーキングというファールを取られることになります。

・目の見える人の協力

敵陣ゴールの裏に、「ガイド (コーラー)」と呼ばれる役割の人が立ちます。攻めている場面でゴールの位置と距離、角度、シュートのタイミングなどを声で伝えます。また、ゴールキーパーは視力的な制限は無いため、視覚障害のない健常者が務めることが多く、自陣での守りについて全盲の選手に声で指示を出します。また、サイドフェンスの向こうに立つ監督は、選手交代の決定などに加えて、ピッチ中盤でのプレーに声を出します。

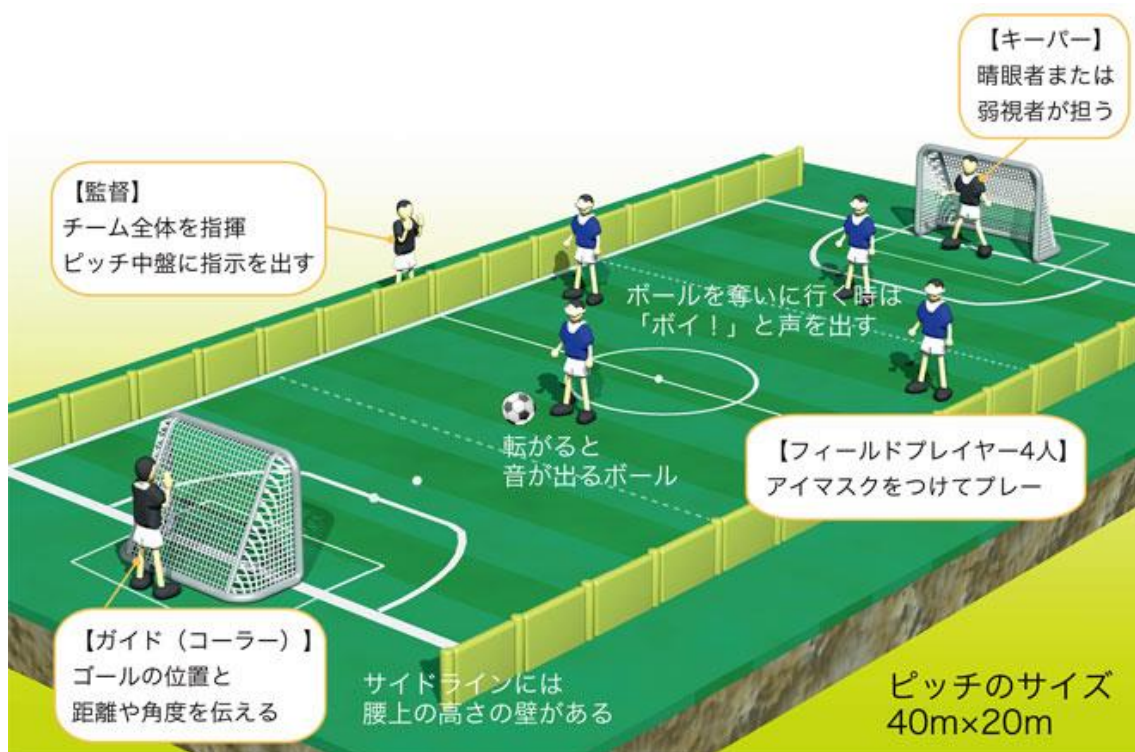
・アイマスクの着用

全盲と言っても義眼の人がいれば、光を感じられる人まで幅があります。その差をなく

して公平にするため、目の上にアイパッチをはり、アイマスクを着用することが義務付けられています。なお、国内ルールでは競技の普及のため、同じ様にアイマスクを着用することで、目の見える人も弱視の人も、全盲の選手と共にプレーできるようにしていますが、国際大会では開幕前に専門医による視力検査があり、全盲と判断された人しか出場できません。

・サイドフェンス

ピッチは、フットサルコートと同じ広さですが、両サイドライン上に高さ1 mほどのフェンスが並びます。ボールがサイドラインを割らないための工夫というだけでなく、選手がピッチの大きさや向きを把握することも助けます。フェンスの跳ね返りを使ったパスもたびたび見られますが、このフェンス際で激しい競り合いが行われることも多く、重要な要素です。試合会場によってはフェンスが用意できないこともあるので、その際には人がタッチライン際に並んで「人壁」を作ることになります。選手が近くに来るときには「かべ！」と声を出し、来たボールを小さく蹴り返したりします。



4. ブラインドサッカーの歴史

・日本に根づくまで

1980年代初頭に開発され、ヨーロッパ、南米を中心に広くプレーされてきたブラインドサッカーですが、現在プレーされているIBSA（International Blind Sports Federation：国際視覚障がい者スポーツ協会）の国際ルールが日本に上陸したのは2001年

でした。まだ日本での歴史は長くないスポーツの様に思えますが、それまでは盲学校で独自のルールを考案し、プレーしてきた歴史もありました。90年代には千葉県立千葉盲学校で「ペガサス」というチームが発足し、テレビにも取り上げられました。

2001年9月、当時アジアで唯一ブラインドサッカーを導入していた韓国に、「視覚障がい者の文化を育てる会」を中心とした視察団が向かいました。アイマスクをした選手が自由に走り回るプレーを目の当たりにし、日本でもこのサッカーを広めていこうと国内での普及が始まります。

当時、手元にあったのは数本の試合の映像と、英文のルールなどわずかな資料でした。しかし、多くのサポーターの協力により、2001年11月11日に日本視覚障がい者サッカー協会（JBFA）の前身となる「音で蹴るもうひとつのワールドカップ実行委員会」の発足式が大阪にて行われました。そして、その後の2002年10月、JBFAが正式に発足しました。

・国内での普及

協会設立後は急速に全国に普及し、2003年3月9日、東京・多摩にて初めての全国大会である『第1回日本視覚障がい者サッカー選手権』が実施されました。全国から4チームが参加しました。以降、毎年行われる日本選手権をはじめとして、東日本、西日本選手権など各地で盛んに試合が行われていました。

2013年現在では、日本選手権は第12回を数え、参加チーム数も11チームと年々増えています。また、地域大会は、関東リーグ、関西リーグ、東北北信越リーグ、九州四国リーグと4つの地域に分けられました。その地域リーグの上位チームが出場できる「フィアットカルチョ」（旧 プライムカップ）も春に行われています。

5. 国際大会

日本代表の国際試合としては、まだJBFAの名称が「音で蹴るもうひとつのワールドカップ実行委員会」だった2002年5月3日に、韓国・ソウルのブラインドサッカー専用競技場にて行われた、日本対韓国の試合が最初の国際舞台となりました。結果は、すでに世界選手権に出場経験のある韓国に対し善戦、0-0で前後半終了。PK戦（1-2）で韓国代表に惜敗しました。

世界的な国際大会として、ワールドカップと同じ年に行われる世界選手権と、夏季五輪と同じ年に行われる一度行われるパラリンピックが大きな大会となっています。日本代表はこれまで3回の世界選手権に出場していますが（過去最高は2014年の12チーム中6位）、パラリンピックにはまだ出場することができていません。あと一步のところで惜しくも本戦に届かないという戦いが続いています。

ちなみに2014年の第6回世界選手権は日本で行われ、アジアで初めての開催となりました。

た。多くの大衆の注目を集めたとは言いがたい面もありますが、確実にスポーツとして成熟してきており、これからさらに周知されることによって未来も確実に開けてくることでしょう。

6. 興味を持ったら

公式サイトでは、

「意外にも ブラインドサッカーのメディア露出率が高いです。テレビ、新聞、雑誌、インターネット。さまざまなメディアでのブラインドサッカー情報をチェックするだけでも、私たちの「いま」が伝わるはず。また、ウェブサイトではツイッターや Ustream で、いろんなつぶやきや、試合中継まで見る事が出来ます。」

と紹介されています。

また、各種イベントやボランティアでの参加、もちろん試合観戦も含めて、いろいろな方法でブラインドサッカーを知ることができますし、ブラインドサッカーについてはフィクションやノンフィクション問わず、読み応えのある書籍も多くあります。これについては本文章の最後に紹介しますので、少しでも興味のある方はぜひ手にとってみて下さい。

参考サイト

- ・第 11 回ロービジョンフットサル日本選手権大会ー頂点を決める闘いを見逃すな!!

<http://blindsoccerb23-2013.jimdo.com/>

- ・日本ブラインドサッカー協会（JBFA）公式サイト

<http://www.b-soccer.jp/>

- ・IBSA ブラインドサッカー世界選手権 2014 公式サイト

<http://www.wc-blind-football.com/>

関連文献

- ・闇の中の翼たち ーブラインドサッカー日本代表の苦闘ー
岡田 仁志／著、幻冬舎、2009 年
- ・サッカーボールの音が聞こえる ーブラインドサッカー・ストーリーー
平山 譲／著、新潮社、2010 年
- ・ブラインドサッカーがくれた生きる勇氣 ー目が見えなくてもサッカーはできるー
釜本 美佐子／著、日本文芸社、2013 年
- ・日本の 10 番背負いました ブラインドサッカー日本代表・落合啓士
落合 啓士／著、講談社、2015 年

視覚障害者柔道

清水 大祐

1. 視覚障害者柔道とは

視覚障害者柔道とは、その名の通り視覚に障害のある人々が行い、楽しむ柔道である。試合は IJF（国際柔道連盟）試合審判規定、IBSA（国際視覚障害者スポーツ協会）柔道試合規則および大会申し合せ事項に則って行われるが、障害に配慮し一部に変更が加えられる。したがって、試合のルールはいくつかの点を除いて一般の柔道と基本的に同じである。また段位は講道館において取得するというのも一般の柔道と同じである。

試合の参加資格は以下の IBSA（国際視覚障害者スポーツ協会）によるクラス分け（文献 3）に該当する者に与えられる。

B1：視力 0 から光覚までの者で、いかなる距離、方向からも手の形が見分けられない

B2：手の形の認知可能から視力が 2/60 (0.03) までか、視野が 5 度まで、あるいはその両方

B3：視力が 6/60 (0.1) までか、視野が 20 度まで、あるいはその両方

ただし、試合自体の出場選手のクラス分けは、障害の重さではなく体重によって行われる。体重によるクラス分けは以下の通りである。

男子…60kg、66kg、73kg、81kg、90kg、100kg、100kg 超級

女子…48kg、52kg、57kg、63kg、70kg、70kg 超級

2. 一般の柔道との相違点

視覚障害者柔道と一般の柔道との相違点は、主に以下の 4 つである。

- (1) 対戦する選手は、主審が「はじめ」の宣告をする前に互いの位置を確認し、袖や襟等を持って組んだまま試合が始まる。「はじめ」の声がかかる前に手を離してはならず、主審の「はじめ」の宣告をもって試合が始まる。
- (2) 選手が試合中に相手選手と離れてしまったときは、主審が「まで」を宣告していったん試合を中断し、試合開始位置にもどって「はじめ」の合図で再開する。
- (3) 場外に出ても反則とはならない。一般の柔道では、立ち姿勢、寝技のいずれにおいても、場外に出るか、相手を故意に場外に押し出してしまうと、「指導」を受けることになる（文献 4）が、こうした規定は基本的に適用されない。ただし、故意に利用したとみなされる場合には、適用されることもある。
- (4) 全盲の選手の柔道着には赤い標識が付けられる。この規定は国内大会においてのみ適用される。

前述の通り、以上の 4 点以外は基本的に一般の柔道と異ならない。すなわち、一般の柔道と同じく、一本で勝敗が決まり、技あり・有効などのポイントが存在する。選手同士が

組んだ状態から試合が始まるので、技がきれい決まることが比較的多く、試合開始直後に技をかけることも可能であり、視覚障害者柔道の魅力の一つとなっている。

3. 視覚障害者柔道の歴史

視覚障害者と柔道との関わりは古く、1882年に講道館柔道が創始されて以来、あまり工夫をせずに晴眼者と視覚障害者がともに練習や試合ができることもあり、晴眼者に交じって視覚障害者が練習していたという（文献2）。そして、1931年に京都府立盲学校が当時の「体操科」の授業においてそれまでの相撲の代わりに柔道を取り入れて以降、盲教育の現場にも柔道が広まっていくこととなった。戦後、GHQにより学校における武道の教育が禁止され、柔道の授業も中止となったが、1950年には再開された。その後、1955年の近畿地区盲学校柔道大会を皮切りに、全国各地域で盲学校柔道大会が開催されるようになった。こうして盲学校を中心として柔道に親しむ視覚障害者は増えていき、1986年に始まった全日本視覚障害者柔道大会は、現在に至るまで毎年開催され続けている。

また、1981年にIBSA（国際視覚障害者スポーツ協会）が結成されて以来、世界選手権、地域選手権などの国際大会が盛んにおこなわれるようになり、1988年のソウル大会からはパラリンピックの正式種目にもなった。こうした国際大会には日本人選手も数多く参加している。

4. おわりに

今回の調べで分かったことのひとつに視覚障害者柔道では選手同士が組んだ状態から試合が始まるため、技がきれいに決まりやすいということがあった。これは障害に配慮した措置の結果生み出された、競技の新たな魅力といえるのではないのだろうか。また、国内外で多くの視覚障害者が試合に参加しており、その裾野は大きく広がっている。様々な魅力を備えたこの競技に今後も注目していきたい。

参考文献

- 1) 藤田紀昭『障害者スポーツの世界 アダプテッド・スポーツとは何か』角川学芸出版、2008年
- 2) NPO 法人日本視覚障害者柔道連盟ホームページ judob.or.jp/ (2015年11月16日閲覧)
- 3) 佐藤紀子「視覚障害者スポーツ競技におけるクラス分類およびカテゴリー分類の現状と課題」『日本大学歯学部紀要 34』、2006年（PDF形式：<http://www2.dent.nihon-u.ac.jp/bulletin/kiyou34/34-13.pdf>、2015年11月16日閲覧）
- 4) 国際柔道連盟試合審判規定禁止事項一覧
<http://maebashijudo.momo.selfip.org/kokusai.pdf> (2015年11月16日閲覧)

グランドソフトボール

田中 心・田口 麻人（注1）

1. グランドソフトボールとは

グランド（Grand）は、「壮大な、堂々たる、素晴らしい」などの意味をもつ語だ。グランドソフトボールは、観戦者に強い感銘を与える素晴らしいスポーツなのである。運動場（Ground）の意味ではない。現在、視覚障害者と健常者が共に楽しめる日本独自のスポーツとして広まりつつある。

2. 歴史

グランドソフトボールは、いつ誰が提案したものであるかははっきりしていないが、1933年に横浜で行われた第9回全国盲学校生競技大会で日本最初のグランドソフトボールの対抗試合が行われたとされている。当初は「盲人野球」の名称で、各地の盲学校で盛んに行われていたようである。その後1951年～66年まで、全国盲学校野球大会が各地で開催されていた。さらに数年の中止期間の後、1971年に社会福祉法人日本盲人会連合が全国盲社会人野球大会を開催、翌年には第2回大会が開かれた。そして1973年の第9回全国身体障害者スポーツ大会から、盲人野球競技として組み込まれた。

この競技はソフトボールの規則に近く、またノーマライゼーションの考えから、1994年にグランドソフトボールと名称を変更し、規則も改編された。1998年、社会福祉法人日本盲人会連合組織の中に全日本グランドソフトボール連盟が組織化され、2000年からは全日本グランドソフトボール選手権大会が開催されており、そのほかにも地域で様々な大会が開かれている。

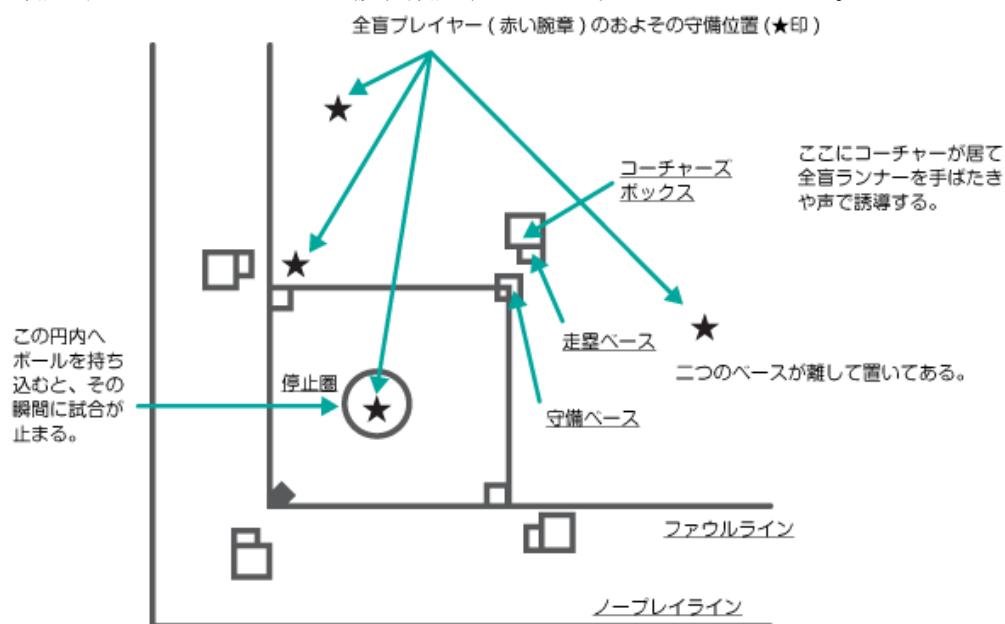
3. ルール

グランドソフトボールは、視覚障害者と晴眼者が視力の有無・程度に関わらず共に楽しめるスポーツであるというところに大きな特徴がある。基本的なルールはソフトボールと同じだが、1チームは10人で構成されている。このうち4人以上は全盲者でなければならない。全盲者はアイシェードを着けなければならない。なぜ目が見えないのにアイシェードを着けるのかというと、目が見えているのではと疑うほどすごいプレーをする選手がいるからである。弱視者や晴眼者であっても、アイシェードを着ければ全盲選手としてプレーすることができる。

ボールは、ハンドボール3号球（注2）と同じ規格のものを使用する。バットは野球のものとはほぼ同じで、グラブは使わない。投手は全盲者、捕手は弱視者でなければならない。投手は捕手の5秒以内の手ばたきを聞いて方向を調節する。投球は下投げまたは横投げで行い、本塁を通過するまでに3バウンド以上しなければならない。本塁の一角でも横切れば

「ストライク」となるが、全盲打者の時には本塁中央を通過する際にボールが半個分以上浮き上がると「ボール」になるなど、視機能の程度によって配慮がなされている。投手によっては、ストレート、カーブ、シュートなどを使い分ける選手もいる。死球の扱いはなく、ストライクゾーン外の投球に打者が触れたときはすべて「ボール」の判定となる。

バッターは、バットでボールを打ち、走る。打つ時の姿勢は、立ったままゴルフのようにして打つ場合と腰を低くしてバットを水平に振る場合がある。ベース付近での衝突を避けるため、下図のようにすべての塁に守備用ベースと走塁用ベースの2つが少し離れて設置されている。アイシェードを着けた打者が打った時には、走塁用ベースの近くにいるコーチャーが手をたたいたり声を出したりして走者を誘導する。打球が両翼45メートルにあるフェンス（いわゆるラッキーゾーンのように設置される）をノーバウンドで超えればホームランとなる。また、内野地域にある全盲打者の打球は、遊撃手、捕手以外の弱視野手は捕球することができない（反則捕球）などの考慮がなされている。



全国盲学校野球大会ホームページより

守備では、全盲野手が捕球すれば、転がったボールであってもフライアウトと同じ扱いになる。ただしこの際、弱視者は全盲者に対し、打球の方向などの指示をしてはいけない（指示反則）。この反則をすると、ファウルグラウンドでは「テイクワン」、内野のフェアグラウンドでは「テイクツー」、外野のフェアグラウンドでは「テイクスリー」の塁を相手に与えることになってしまう。また、全盲走者を刺殺、封殺するときは弱視者がボールを持ったまま塁を踏みに行くことができず（持ち込み禁止プレー）、必ず送球によってアウトにしなければならない。投手板を中心に半径1.5メートルの「試合停止圏」という円があり、ボールを持った野手がこの円に入ったり円内にいる野手に送球するとボールデッドとなり、走者はそれ以上進塁できなくなる。

走塁においては、弱視者は投球以前に離塁するとアウトになるが、全盲走者は捕手の手ばたきが始まった時点で離塁を開始できる。

グランドソフトボールは音を頼りに行う競技であるため、選手、観戦者共に注意が必要である。特に、全盲打者が打席に立っているときと全盲野手が捕球しようとしているときには絶対に声や音を発してはいけない。ルールとしては、全盲打者のとき、投球が本塁を通過するまでの間に音や声が発せられた時には、それを発したのが攻撃側であれば守備妨害でバッターアウト、守備側が音を発したときは打撃妨害でテイクワンベースが与えられる。

4. グランドソフトボールの魅力

この競技の魅力はなんといっても、全盲者と弱視者、晴眼者が男女共に楽しめるところにあるだろう。しかも、晴眼者がアイシェードをして全盲選手として参加するというだけでなく、アイシェードを着けずに選手として参加することも、ランナーコーチとして参加することもできる。このランナーコーチはとても重要な存在で、全盲走者にベースの位置を教えるのが主な役目だが、声や手ばたきだけで位置を伝えるのは決して簡単ではない。全盲者と弱視者、そして晴眼者がそろって初めてチームが成立するのである。だから、グランドソフトボールは単なる「障害者のための」スポーツではない。「障害者と健常者が共に楽しめる」スポーツなのだ。

視覚障害者は、普段目が見えない生活を送る中で聴覚や触覚など、視覚以外の機能を用いる機会が多い。そのためそれらの感覚に敏感であると言われるが、グランドソフトボールでは選手はその能力を最大限発揮できる。投球を例にすると、投手は全盲者なので、捕手の手ばたきを聞いて本塁の方向をつかみ、ストライクを投げなければならない。本塁は通常のものと同じ大きさで、マウンドから本塁までの距離は約12メートルである。目が見えていてもストライクを投げるためには少なからず練習が必要だと思うが、晴眼者の方は一度目隠しをしてどれくらい正確に投げられるか試してみてもはどうだろうか。ちなみにボーリングでは一番手前のピンまでの距離が約18メートルである。

守備や打撃では、ボールの転がる音を頼りに位置をつかむ必要がある。たとえば守備では、全盲野手が捕球するときは他の野手が打球の位置を教えることができないので、走者や野手の足音、ランナーコーチの声や手ばたきといった様々な音の中からボールの転がる音を聞き分け、さらにそれがどの方向にどれくらいの速さで転がっているのか判断しなければならない。目を閉じて想像してみてほしい。今あなたの周りで聞こえている様々な音の中から、特定の音だけを聴き分けてそれがどの方向に向かっているのかわかるだろうか。全盲者には晴眼者よりもその能力に長けた人が多い。この競技では全盲野手がゴロを捕球すれば即アウトになるので、優れた全盲選手がいるチームは圧倒的に有利になると言える。

5. グランドソフトボールの競技としての現状

全年齢層を対象としたグランドソフトボールの主要な大会としては、前述のとおり『全日本グランドソフトボール大会（以下、全日本）』と『全国身体障害者スポーツ大会におけるグランドソフトボール競技（以下、障スポ）』の二つが存在する。この二つの大会は協会ホームページに一部の年を除いた（注3）過去10年分の試合成績が残っている。そのデータ（16大会・250試合分）を用いて現在の競技の状況を述べることで、グランドソフトボールの競技としての現状について簡単に述べる。

まず先攻と後攻の対戦成績は後攻の130勝101敗19分（注4）である。後攻の勝率が約56%と若干高くなっているが、これは分析に用いた対戦数を考えると必ずしもルール・運営上の問題とは限らず、偶然であると思われる（注5）。従って、ルール上は先攻・後攻に対して有利不利が存在しているとは言えない。

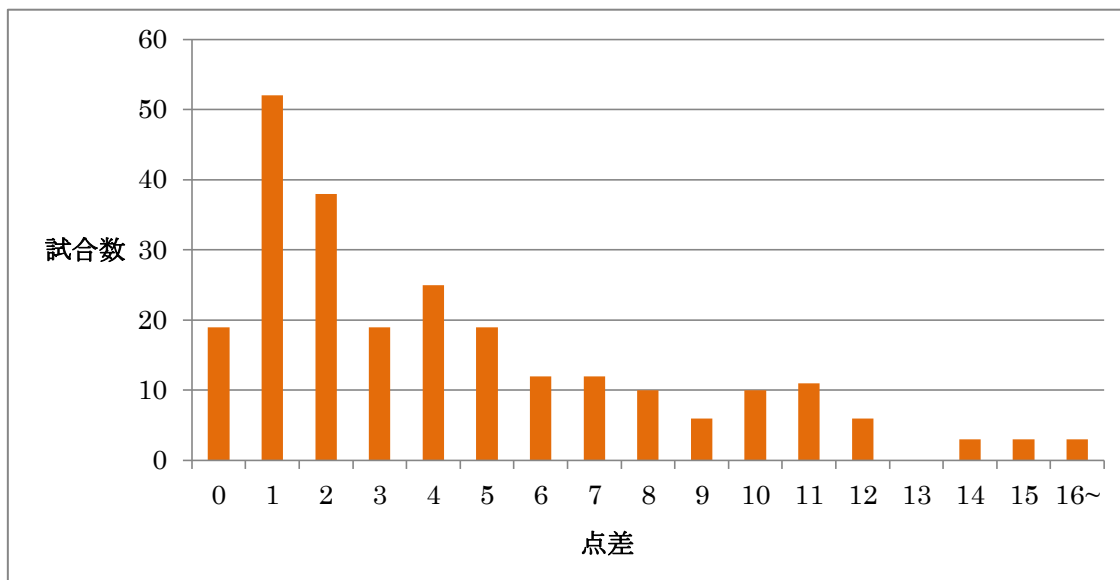
次に地域別（注6）の勝敗を見ると以下の表のようになる。

	勝率	勝	負	分
四国	0.725	50	19	9
東海	0.593	48	33	7
九州・沖縄	0.574	31	23	2
中国	0.543	25	21	4
近畿	0.439	25	32	4
関東	0.370	20	34	2
北信越	0.353	18	33	5
東北・北海道	0.280	14	36	5

この表を見ると、少なくとも過去10年の間には明らかに「西高東低」の傾向を伺う事が出来る。こうした傾向はかつての高校野球と共通しており、気候等が原因に挙げられる事が多いが、関東地区のチームも大きく負け越していることから、それ以外の何らかの理由もあると考えられる。特に圧倒的な強さを見せているのが四国地方であり、全日本大会で2007～2013年まで6連覇を達成した徳島県（21勝7敗4分）の活躍等により大きく勝ち越している。一方で関東、北信越、東北・北海道の各地区は勝率4割を切っており、特に東北・北海道地区ではこの10年間の通算成績で勝ち越しているチームが存在しない状況である。

最後に、1試合・チーム当たり平均得点は4.14点である。全日本・障スポの両大会とも進行上試合時間に制限が存在するため、イニング数は試合により3～7回程度の間で変動があるが、平均的な攻撃イニング数を仮に5回とすれば得点率は7回あたり5.80点、9回あたり7.45点となる。もちろん、行われているレベルや環境等にも依存するが、これは晴眼者の行うソフトボール・野球に比較するとかなり点数が入りやすい環境であることを示していると思われる。従って、晴眼者がソフトボール・野球の感覚でグラン

ドソフトボールを観戦した場合、かなり点が入りやすいスポーツだと感じるかもしれない（注 7）。また各試合における点差は以下のグラフの通りとなっており、多くの試合（約 40%）が同点～2 点差の接戦となっていることがわかる。



6. まとめ

障害者スポーツというと「障害者でも楽しめるような配慮がなされたスポーツ」というイメージがあるかもしれないが、グランドソフトボールは「障害者に配慮がなされた」スポーツではないと思う。晴眼者がアイシェードを着けるなどしてハンデを負わなくても、晴眼者は晴眼者、全盲者は全盲者、弱視者は弱視者のそれぞれの長が活かせる競技だからである。「障害者に配慮する」と言うと、障害をハンデと見てその上で不便が無いように取り計らう、というイメージがある。それも欠かせないことだと思うが、逆に障害者にしかできないこともあるのだから、障害者への配慮は押しつけがましいものであってはならないだろう。その点この競技では、晴眼者も視覚障害者も互いに相手を必要とし、それぞれの苦手なところを補い合っている。健常者が一方的に障害者を「サポート」するだけではないのだ。ここが、グランドソフトボールの **Grand** たる所以だと思う。今はまだ本格的に競技が行われているのは日本だけだが、世界中のより多くの人々がグランドソフトボールと出会い、感銘を受けることを願っている。

注釈

- 1) 本稿の執筆は 1・2・3・4・6 節を田中が、5 節を田口が担当し、すり合わせの上で一つの調査報告としてまとめたものである。
- 2) ハンドボールでは、男子一般・大学・高校生用として使用される。

- 3) 2013年度全国グランドソフトボール大会・2012、13、15年度全国身体障害者スポーツ大会
- 4) ここで「分」とは規定時間内に試合の決着がつかなかったため、抽選等によって勝者を決定した試合を指す。
- 5) 先攻の勝ちを1、後攻の勝ちを0として、母集団が標準偏差1の正規分布に従っていると仮定すると、帰無仮説「先攻の勝率が50%」に対するt値は約0.95となる。
- 6) 連合チームなどがあるため、県別ではなく地域別で集計している
- 7) ただし会報第9号で連盟名誉会長（当時）の山田信夫が、障スポの前身となる第1回大会が行われる前の1971年の状況を回想して『それまでは皮製のハンドボール、投手にとっては手掛かりがよく投げやすいボールでしたが、打者にとっては重くて、茶色で見づらく打っても飛ばず、投手優先の競技でした』と述べており、歴史的に点が入りやすいスポーツだったわけではないようである。これは晴眼者の野球の得点環境の歴史的変化とも共通している。

参考文献

- 1) 高橋明『障害者とスポーツ』岩波書店 2004年
- 2) 日本障害者スポーツ協会編『障害者のスポーツ 指導の手引（第2次改訂版）』ぎょうせい 2004年
- 3) 『視覚障害者と健常者が共に楽しめるスポーツ』社会福祉法人桜雲会点字出版部 2013年
- 4) 全日本グランドソフトボール連盟ホームページ
<http://gurasofu.web.fc2.com/> （2015年11月13日アクセス）
- 5) 全国盲学校野球大会ホームページ
<http://grand-softball.com/> （2015年11月13日アクセス）

フロアバレーボールについて

豊福 美和子

第1節 はじめに

2015年夏、世界中がFIVBワールドカップバレー一色でした。日本は最終的に女子5位、男子6位という結果に終わりましたが、選手たちの一生懸命頑張る姿は多くの日本人に感動を与えたのではないのでしょうか。

ところで、バレーはバレーでも、みなさんは「フロアバレーボール」というスポーツをご存知でしょうか？これは視覚障害者と晴眼者が一緒にできるスポーツのひとつです。

フロアバレーボールは通常のバレーボールと比べて、選手の動作やボールの動きはまるで違い、全く世界観の異なるスポーツと言ってよいでしょう。通常のバレーボールは三次元のスポーツですが、フロアバレーボールは二次元の平面のスポーツといえます（注1）。

ただ、だからといってフロアバレーボールが通常のバレーボールに比べて魅力に乏しいスポーツかという、決してそのようなことはありません。世界観は大きく違っていても、フロアバレーボールには特有の魅力があります（参考資料1）。

それでは、フロアバレーについて第2節以降で詳しく説明していきます。

第2節 フロアバレーの歴史

フロアバレーの歴史については、以下のようなことが分かっています（参考資料2）。

- 1959 年 横浜市立盲学校体育科教諭田中四郎氏が関東地区盲教育研究会（現在の関東地区視覚障害研究会）で「盲人バレー」について発表（起源は定かではない）。
- 1960 年代 各地の盲学校で「盲人バレーボール」と呼ばれて盛んに行われるようになる。
- 1965 年 岐阜県立盲学校体育科教諭の佐々木徹氏の「フットバレーボール」が競技規則の資料として残っている。
- 1960 年代後半～1970 年 盲学校の間においてブロック大会が開催されるようになる。（ブロック毎にルールが微妙に違っていたため、ブロックを超えての試合は行われなかった）
- 1977 年 全国盲学校スポーツルール統一委員会が、「全国盲学校盲人バレーボール規則」を作成。しかし、広まらなかった。
- 1984 年 統一ルールについて、日本盲人会連合青年協議会のスポーツ対策分科会が検討。しかし、なかなか結論が出されなかった。
- 1991 年 統一ルールを作成するため、神奈川県座間市視覚障害者協会（鈴木孝幸会長）主催の第1回全国盲人バレーボール選手権大会が開催（注2）。
- 1993 年 身体障害者競技規則集から盲人バレーボールの規則を削除。

1994 年 9 月 厚生大臣杯の全国盲人バレーボール大会が神奈川県身体障害者連合会・神奈川県視覚障害者福祉協会の主催で、神奈川県視覚障害者球技審判協会が主管し、座間市において開催（注 3）。

11 月 現在の規則の基礎となる競技規則集が発行される。

1995 年 名称を今までの盲人バレーボールからフロアバレーボールと改名。障害の有無にかかわらず誰でもできるニュースポーツとして全国に広まる（注 4）。

1997 年 群馬県で行われた第 4 回厚生大臣杯で、対戦記録用紙が群馬県バレーボール協会（堤清夫理事長）塚田元期氏により改正。

1998 年 7 月 日本フロアバレーボール連盟が結成。ルール講習や審判練習が本格的に行われるようになる。

2000 年 準拠している 6 人制バレーボールルールの規則改正に伴い、フロアバレーボールのルールも改正。

2002 年 2 年ごとの見直しに従って改正と解説の加筆が行われる。

第 3 節 フロアバレーのルール

フロアバレーのルールは主に次の 11 個です（参考資料 3）。

①コートとネット

コートは成人 6 人制バレーボールで使用するコートと同じ規格（9×18m）ですが、ネットは床上に 30cm の隙間ができるように張るため、ネットの上下にワイヤーが通された専用のネットと、それをセットするための専用ポールが必要となります（図 1）。これらは全国各盲（視覚支援学校）や障害者スポーツ（福祉）センターなどに整備されています。

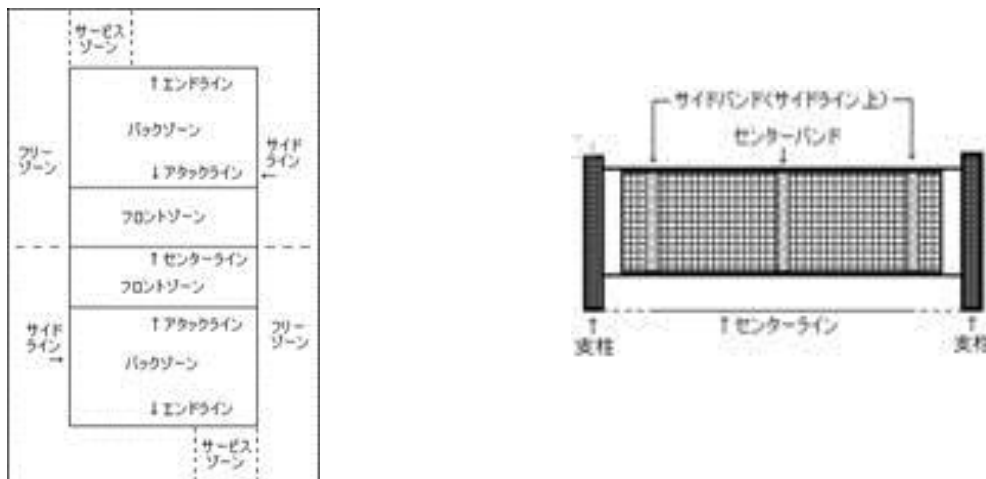


図 1 コートおよびネット

②ボール

弱視の見やすさを考慮し、連盟が公認球と認定する天然皮革製の白色ボール（モルテン

フロアバレーボールについて（豊福）

MTV5FV)を使用します（図2）。

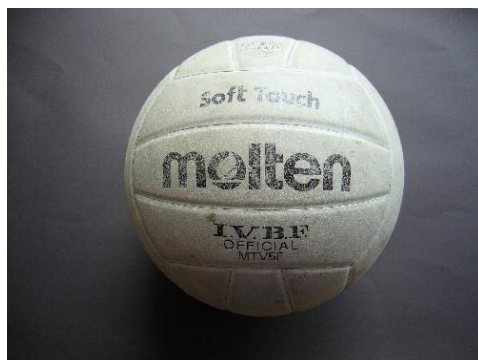


図2 フロアバレー公認球

③チーム構成

チームは前衛3名、後衛3名の計6名で構成され、前衛選手はアイマスクもしくはアイシェード（図3）を着用し、何も見えない状態となります。後衛選手は視界を遮るものは特に着用しません。



図3 アイシェード

④基本動作

前衛選手は、床面を転がったり跳ねたりするボールの音や味方後衛選手の支持を聞きながらプレイするため、しゃがんだ姿勢となることが多く、よって、身体のどの部にボールが触れても反則にはなりません。また、ボールを撃つ時は、転がったり跳ねたりしているボールを床上でいったん押さえ込み、続いて片手でボールを押さえながら、それを軸に身体を移動させ、撃つ方向が定まれば握り拳でボールを撃ちます。なお、これらの動作は一連の動作としてスムーズに行うことが肝要です。また、この動作中はボールを持ち上げたり、大きく動かしてはいけません。

後衛選手は、ボールを目で見てプレイするので、前衛選手のようにボールを止めてしまうプレイはキャッチボール[ホールドイング]という反則となるため、明瞭にヒットするようにレシーブやトス、スパイクをします。この際、両手をしっかりと組むか、片手を必ず握り拳にしてプレイしなければなりません。

⑤サーブ

コートの後方の境界線であるエンドラインの外側に区画されるサービスゾーン内にボールを置き、主審のサービス許可の吹笛後、自らのサービス番号を明瞭に告げ、5秒以内に撃たなければなりません。このサービス番号とは、6人の選手それぞれにローテーション順に基づいて決められているサーブを打つ順番のことです。

なお、前衛選手の場合は、方向指示の目的で味方選手がネットの付近で声や手ばたきをした後に主審はサービス許可の吹笛をします。

このようにして撃たれたサービスボールは、相手選手に触れるか、もしくは相手側コートの後衛ゾーンに達した時点でサービス完了となります。なお、サービスボールがネットの下端に触れることは反則ではありません。

⑥ラリー

正しく撃たれたサーブに対し、レシーブ側チームは3回までのプレイで相手側コートへ打ち返さなければなりません。レシーブ側チームの前衛選手に最初のボールの接触があった場合、これはブロックとみなされ、プレイ回数には数えません。

⑦ボールのインとアウト

フロアバレーボールでは、ボールは常に床面を転がって来るという特徴から、ボールのインとアウトはサイドラインとアタックラインとの交点付近のどこをどのように通過したかで判断することになります。

ルール上、アタックラインは前衛ゾーンですので、ボールの接地面がアタックラインの後方の床面であればボールインです。しかし、ボールインの軌道であっても後衛ゾーンの床面を空過したり後衛ゾーンに達する前にコート外に出たボールについては、サイドラインを超えた瞬間にボールアウトの判断が下されます。

⑧ブロック

ブロックは前衛選手のためのプレイで、相手側コートから撃たれたサーブやアタックなどに対し、ネット付近(ネットから約1.5m以内)でしゃがんだ姿勢の前衛選手にその打球が当たった場合をいいます。

⑨リターンプレイ

これは、レシーブ側チームの第2打目のプレイにおいて、コート外のフリーゾーン内にあるボールへのプレイに関するルールで、このような場合、後衛選手はコートを出てフリーゾーン内でプレイすることが認められています。ただし、このプレイではボールは味方コート内に返球しなければならず、相手側コートへ返球してしまった場合はリターンミス

となります。

しかし、アイマスクやアイシェードを装着している前衛選手にこのルールは適応されません。

⑩主な反則

以下のようなプレイは反則となり、相手チームにポイントが入ると共に、サービス権を所有していた場合はサービス権も相手チームに移行します。

- ・サーブミス

サービスしたボールが味方選手に当たったり、ネットの上を通過したり、ネットに跳ね返されてレシーブ側チームのコートへ行かなかった場合など。

- ・キャッチボール[ホールディング]

前衛選手がいったん押さえ込んだボールを持ち上げたり、大きく動かした場合。また、後衛選手が動いているボールを止めてしまったり、手のひらでボールを撃った場合など。

- ・ダブルコンタクト[ドリブル]

前衛選手では、ブロックを除いたプレイにおいて、身体に触れて弾いたボールを押さえ込むために、元いた場所から完全に両足を動かしてボールを押さえ込んだ場合はこれにあたります。また、アタックしたボールがネットに当たって跳ね返り、再びその選手に触れた場合もこれにあたります。

後衛選手においては、レシーブの際など、身体の2カ所以上に続けて当たった場合などがこれにあたります。

- ・フォー・コンタクト[オーバータイムズ]

3回のプレイで相手側コートへ返球できなかった場合のことです。

- ・ボール空過

サーブやアタックされたボールは、相手選手または相手側コートの後衛ゾーンの床面に触れることなく、コート外へ出た打球は反則となります。

- ・ネットタッチ

前衛選手のみが侵す反則で、ボールに触れていると同時にネットにも触れてしまった場合のことです。

- ・オーバーゾーン

前衛選手が相手側コートにあるボールを押さえた場合。後衛選手においては、アタックラインを踏み越した場合をいいます。

⑪得点と試合の勝ち負け

得点は、アタックなどが決まった場合や相手がミスをした場合などにその都度入ります（ラリーポイント制）。また、ルールでは **25** 点を取ったチームがそのセットの勝者となりますが、時間の都合で **21** 点や **15** 点に設定されることもあります。

第4節 フロアバレーの大会

フロアバレーの主な大会として、年度チャンピオンを決める「JFVA クラブ日本一決定戦」（日本フロアバレーボール連盟主催）が毎年行われます。この大会には第1部と第2部があります。第1部では、Aプール4チーム、Bプール4チームがそれぞれ総当たりリーグ戦の予選を行ったあと、各プール1位のチームは決勝戦を、各プール2位のチームは3位決定戦を行い、順位が決定します。第2部では4チームが総当たりリーグ戦を行い順位が決定します（参考資料4）。

このように、大会を開催できてはいるものの、まだまだフロアバレーを取り巻く状況はきびしいものがあります。全国統一ルールができたものの、全国全ての都道府県にチームがあるわけではなく、以前のままのローカルルールを使用している地域もあります。また、東京や神奈川、大阪府や福岡市では多くのチームが活動していますが、その他の都道府県では1もしくは2チームというのが現状です。さらに、競技運営に欠かせない審判は視覚障害者ではきびしい面があることは否めず、どうしても健常者の協力が不可欠となります。

以下、試合の様子の説明と写真を示します（参考資料5）。

サーブを打つとゲームスタートです。後衛選手は（1番～3番）ボールを所定のエリア内に置き、相手コートに打ち込みます（図4）。前衛選手は（4番から6番）片手でボールを押えて打ちます（図5）。体勢はソフトボールを想起させますね。



図4 後衛のサーブ



図5 前衛のサーブ

自分たちのコートにボールが転がってきたら、後衛の選手は片手または両手を組んでレシーブします（図6）。手の組み方は、一般的なバレーと同じですね。



図6 後衛のレシーブ

ボールをげんこつで殴打することで「アタック」をします。放たれたボールはなかなかの速度で転がります。前衛のアタックをブロックで止めることもできます（図8）。



図7 後衛のアタック



図8 前衛アタックと相手ブロック

第5節 おわりに

私はこれまで、視覚障害者がするスポーツについてほとんど何も知りませんでした。もちろんフロアバレーボールも同様です。海外とは違い、日本では障害者スポーツがあまり浸透していないのが現状です。なので、今回「視覚障害者とスポーツ」というテーマで研究するにあたり、フロアバレーという興味深い競技を知ることができて幸いです。

視覚障害者がスポーツをするうえで大切になってくるのは「音」です。後衛の指示が非常に重要になります。それにより後衛の活躍が大きいと思ってしまうがちですが、上級者になると前衛でも指示がなくても動けるようになるそうです。

誰にでもスポーツを楽しむ権利があり、ルールを少しアレンジするだけで障害者、健全者関係なく競うことができます。フロアバレーは晴眼者と視覚障害者が同じコートで戦うことができるのが魅力的です。視覚障害に関するスポーツはこのほかにもたくさんありますが、これらのスポーツをされる方々のさらなる活躍を期待しています。

注釈

- 1) 三次元：ボールが空間を移動するという意味。二次元：ボールが床の上を移動するという意味。
- 2) この大会のルールは、全国身体障害者スポーツ協会編の「盲人バレーボール競技規則（1985年制定）」を使用して実施された。これは、1985年から1992年まで日本身体障害者スポーツ協会発行の競技規則集に掲載されていたものである。このルールの一部を日本盲人会連合青年協議会（本山裕志会長）が、神奈川県視覚障害者球技審判協会（君嶋武司会長）の牛島秀保・塩沢哲夫の両氏の協力を得て改正を行い、その規則を日本身体障害者スポーツ協会へ提出した。
- 3) その後各地で、全国レベルの大会が開催され、現在ではブロックを超えて試合ができるようになっている。

4) 一方、海外にもアジアの障害者文化交流協会（五十嵐紀子会長）の手によって、1993 年・94 年マレーシア、95 年中国、97 年ベトナム、2001 年アメリカにとその架け橋が繋がって、今やアフリカやヨーロッパからも問い合わせが来ている。

参考資料

- 1) 日本フロアバレーボール連盟 http://www.jfva.org/shall_we_play_fvb.html
- 2) 長野県フロアバレーボール協会 <http://nfva.web.fc2.com/history.html>
- 3) 日本フロアバレーボール連盟 <http://www.jfva.org/fvex.html>
- 4) 日本フロアバレーボール連盟 <http://www.jfva.org/nihonnichi.html>
- 5) 日本フロアバレーボール連盟 <http://www.jfva.org/>

ゴールボール

溝口 瑳紀・潮 芽衣

1. はじめに

ゴールボールというスポーツを聞いたことがあるだろうか。プレーヤー全員が目隠しをし、視覚以外の全感覚を研ぎ澄ましてボールを投げあい、ゴールを守りあう競技だ。投げるときは、ゴール前を阻む相手選手同士のわずかな隙間を「見」定め、力いっぱい。守るときは、飛んでくる重たいボールの方向をいち早く察知し、体全体をめいっぱい盾にして。一見、我々の思い描くスポーツ一般のイメージとは少し異なるが、2012年に開かれたロンドンパラリンピックでゴールボール女子の日本代表が金メダルを獲得した（注1）ことから分かるように、ゴールボールは、今やスポーツとしての確固たる地位をもって、国外はおろか、国内の至るところでプレーされている。加えてゴールボールは、視覚障害者スポーツというくくりには入るものの、プレーヤー全員が必ずアイシェードという目隠しをして競技を行うため、実際は視覚障害の有無に関わらず楽しむことができるスポーツなのだ。

今回私たちは、京都ライトハウスで毎週木曜日に行われているゴールボールの練習時間にお邪魔し、選手の方々のご指導の下でゴールボールを体験させていただき、さらには選手や審判の方々にインタビューさせていただく機会をいただいた（注2）。インタビューの翌月にIBSAアジア・パシフィック選手権大会（注3）や日本ゴールボール選手権（注4）などの大事な試合を控えていながらも快く迎えてくださった皆さんには、感謝してもしきれない。今回非常にお世話になった京都ゴールボール協会の中村義弘さん、富田晋作さん、崔久夏さん、橋詰伸明さん、寺西修二さん、山本祐介さん、高瀬真依さんたち選手の方々と、審判の新居義徳さんに、心からお礼を申し上げます。

2. 競技ルール（2014年度～2017年度時点）

2. 1 ルールの概要

ゴールボールは、アイシェードと呼ばれる目隠しを着用した3人1チームの2チーム同士が、コート両端にある互いの相手ゴールに向けて音の鳴るボールを転がし投げ（攻撃）、また自分のコートに向かってくる相手ボールからゴールを守る（守備）競技だ。ボールが相手チームのゴールに入ることによって得点となり、その最終的な点の多少で勝敗を決める。基本的なルールについては、日本ゴールボール協会公式ページや、国際視覚障害者競技連盟（IBSA）によるドキュメントファイル（いずれも参考文献に記載）を参照したものの、具体的な内容についての疑問は、今回の体験の際に中村義弘選手や新居義徳審判に直接質問させていただいたことで解消できた。各所に設けたコラムは、その時の実際のやりとりを元に作ったものである。我々の質問全てに対し懇切丁寧にお答えくださったお二人には、

重ねてお礼を申し上げます。

2. 2 コート

コートの大きさは
18m×9m で、バレーボールのコートと同じ広さである。その短辺両側に沿って、幅 9m、高さ 1.3m にも及ぶゴールポストが設置される。

写真 1：ゴールポストを組み立てる選手たち。



コートは 3m 間隔でエリアが分かれており、ゴール側からオリエンテーションエリア、ランディングエリア、ニュートラルエリアとなる。オリエンテーションエリアとランディングエリアを合わせたエリアがチームエリアであり、選手の実質的な稼動域となる（図 1 参照）。



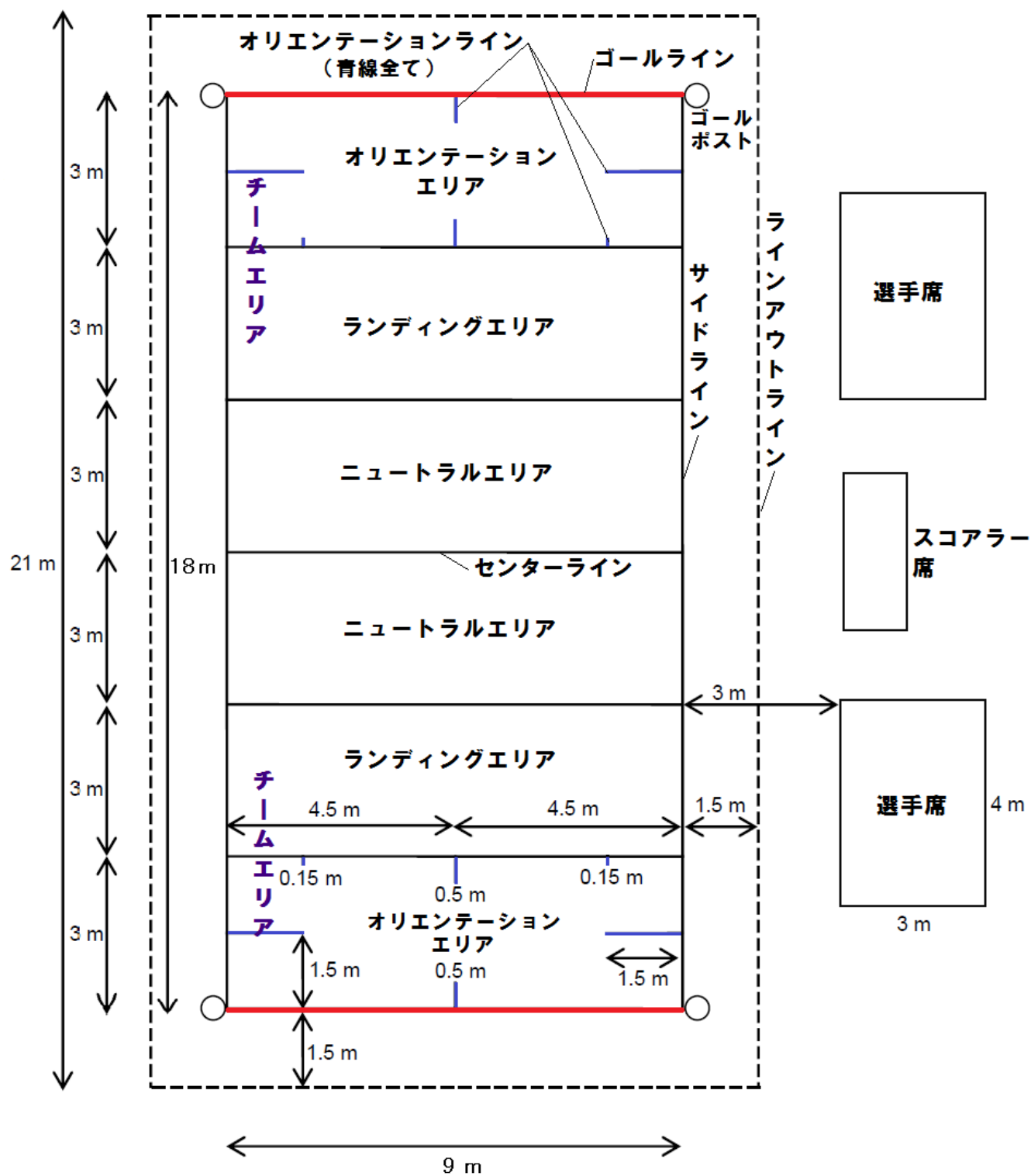
コートのラインとして 5cm 幅の白いテープを貼る。その下に予めタコ糸を引くことで、ラインに凹凸ができ、手や足で触って確認できるようにしている。

写真 2：ラインに沿って貼られたタコ糸。上に白いテープを貼って、ラインの完成。



写真 3：完成したコート（半分）。広々としている。

図1：ゴールボールのコート（公式。注5）



2. 3 競技中に使用する道具

ゴールボールを行うにあたって欠かせない道具として、ボール（2. 3. 1）とアイシェード（2. 3. 2）を紹介する。その他にも両肘と両膝にサポーターを装着するが、ここでは省略する。

2. 3. 1 ボール

重さ約 1.25kg・円周約 76cm の、バスケットボールとほぼ同じ大きさの青いゴム製ボール。中に鈴が入っており、投げると、ボールの所々に計 8 ケ所開いた穴から音が聞こえるようになっている。

コラム：ボールの種類

ゴールボールに使われるボールの重さやサイズは一律で、基本的には同じだが、その製造元によって微妙な差がある。体験中に触らせていただいた、ドイツの KSG 社製のボールと、中国のターゲット社製のボールは、どちらも公式試合で指定され使われるものだが、材質や形に違いがあり、それによってボールの弾み方や感触が微妙に異なっていた。KSG 社製のほうが少し大きく、軽いのでより弾み、感触は柔らかめ。一方ターゲット社製はその逆で少し小さめ、重ためで、あまり跳ねない。公式試合の前は、試合当日に使われる予定のボールの種類も考慮しながら練習を行っているようだ。



写真 4：左が KSG 社製、右がターゲット社製。一見、大きな違いは分からない。

2. 3. 2 アイシェード

スキーゴーグルの形をしたアイマスクで、選手全員がこれをつけて一切の視覚情報を遮断する。試合中にアイシェードを触ると、反則となる（後述）。

2. 4 試合時間とタイムアウト・選手交代

2. 4. 1 試合時間

試合の正規時間（レギュラータイム）は、前半 12 分・後半 12 分の 12 分ハーフ。間に、3 分間のハーフタイムがある。

正規時間内で同点の場合は、延長戦（オーバータイム）を行う。前半 3 分・後半 3 分の 3 分ハーフで、間にはやはり 3 分間のハーフタイムがある。この延長戦では、ゴールデンゴール方式、すなわち、どちらかが得点した時点で終了する方式で対戦する。

延長戦でも決着がつかない場合は、1 対 1 のエクストラスローを行う。ラインアップシートに記載された選手順で、各チーム 3 回ずつの計 6 回行い、勝敗を決める。エクストラスローでも勝敗が決まらない場合は、サドンデスエクストラスローを行う。

コラム：Q&A の時間（1）

Q. 延長戦でも決着がつかない場合に行われる「エクストラスロー」、滅多になさそうだけど、重要ですか？

A. 重要です。特に女子選手の試合の場合、ガンガン点を入れあうわけではないので、2012 年ロンドンパラリンピックの女子準決勝・日本対スウェーデンの試合などがそうでしたね（注 6）。

Q. エクストラスローの順番が載っている「ラインアップシート」とは？

A. まず、ラインアップシートには二種類あります。一つ目は、試合前の選手紹介で使われるもので、出場選手全員の名前が載っています。二つ目が、エクストラスローを行う選手の順番が載ったもの、別名エクストラスローシートで、一つ目の選手順と同じとは限りません。エクストラスローになると、コーチはベンチから出され、指示が出せなくなるルールなので、代わりにこのシートがレフェリーに渡されます。レフェリーは選手名を読み上げ、選手をコートまで誘導する。つまり、この時になるまでエクストラスローの順番は秘密なのです。これもまた、ゴールボールの勝敗を左右する重要な要素の一つです。

Q. 試合中、ハーフタイムなどは知らされるから分かりますが、その他の時の時間感覚はどうですか？肌で覚えるものですか？

A. ボールアウト（2. 6 審判の項を参照）などがある度に、タイマーが止められるのですが、その時々にはコーチが「あと何分！」と教えてくれるのであまり心配いりません。その代わりではないですが、タイマーが止まっていない時にもうっかり残り時間を伝えてしまうことがあります。これはチームペナルティが科される（後述のイリーガルコーチングにあたる）事案なので、うっかり言わないよう、コーチ側にも責任があります。

2. 4. 2 タイムアウトと選手交代

タイムアウトには、チームタイムアウトとオフィシャルタイムアウトがある。チームタイムアウトは、1回 45 秒までと決まっており、チームからレフェリーに申し出る。正規時間では前後半を通じて計 4 回取れるが、その内 1 回は前半に取らなければならない、取らなかった場合は、その 1 回分のタイムアウトは消滅する。延長戦では前後半を通じて 1 回だけ取れる。

一方、オフィシャルタイムアウトは、レフェリーが必要に応じて取れるもので、時間や回数の制約はない。

選手交代（サブスティテューション）は、チームタイムアウトと同様、正規時間内に前後半を通じて計 4 回行える。その内 1 回は前半に行わなければならない、行わなかった場合は、その 1 回分のサブスティテューションは消滅する。延長戦では前後半を通じて 1 回だけ行える。

2. 5 反則と違反

2. 5. 1 反則（ペナルティ）

ペナルティを犯した場合、相手チーム選手にペナルティスローを行う権利が与えられる（後述）。ペナルティは個人によるもの（パーソナルペナルティ）とチームによるもの（チームペナルティ）の二種類があり、それぞれでペナルティスローの内容が少し異なるが、どちらも反則を犯した側にとっても不利な内容となっている。

まず、主なパーソナルペナルティを 6 つ紹介する。

- （1）ショートボール：投球されたボールが、相手（守備）側のチームエリアに触れなかった場合。
- （2）ハイボール：投球されたボールが、攻撃側のチームエリアに触れずに相手コートに入った場合。
- （3）ロングボール：投球されたボールが、攻撃側のチームエリアに触れた後、ニュートラルエリアに触れずに相手コートに入った場合。
- （4）アイシェード：ゲーム中、選手がレフェリーの許可なくアイシェードに触れた場合。
- （5）イリーガルディフェンス：チームエリアに体が触れていない状態で、最初のディフェンス（ボールとの接触）を行った場合。
- （6）ノイズ：攻撃側の選手がボールを投球する時またはその後、守備側に不利になるような音を出したと見なされた場合。

次に、主なチームペナルティを紹介する。

- （1）10（テン）セカンズ：投球されたボールに守備側の選手が触れ、その後投げ返したボールが 10 秒以内にセンターラインを越えなかった場合。
- （2）イリーガルコーチング：オフィシャルブレイク中（ゲームタイマーが止まっている

間）以外に、ベンチにいるコーチ等がコート内の選手に指示を行った場合。

- （３）ノイズ：攻撃側の選手が、味方の投球の時またはその後、守備側に不利になるような音を出したと見なされた場合。

コラム：Q&Aの時間（２）

Q. パーソナルペナルティの一つ、ショートボールとは？ハイボールとの違いは？

A. ショートボール、短いボール。要するに、力不足で相手チームまで届かなかったボールのことで、実際はほぼ起こりえないです。ハイボールもまた読んで字のごとくですが、ボールが自分のエリアでバウンドさせられずに投げられてしまった場合のこと。ちなみにロングボールは、ハイボールにならなかったボールがニュートラルエリアに全く触れることなく相手側のチームエリアまで飛んで行くことで、重ためのケージ社製ボール（コラム：ボールの種類を参照）を使うとより起こりづらくなります。

Q. 2014 年の一部ルール変更によって、テンセカンズの範囲が、かつての「守備の後、相手側にボールを投球し終えるまで」ではなく、「守備の後、相手側に投球し終えたボールがセンターラインを越えるまで」となりました。以前より早く投げないと 10 秒となってしまうですね。また、同ルール変更で、同一選手が 3 回以上連続で投げるとペナルティとなるサードタイムスローがなくなりましたね。

A. テンセカンズの 10 秒間は実質短縮されましたね、これによって試合はより難しくなったといえます。サードタイムスローがなくなったことでは、同じ選手が 10 回でも 20 回でも連投してよくなりました。点の取れる人がたくさん投げるのもいいかもしれませんが、同じ人がボールを投げていると、その人のタイミングにみんな耳が慣れて、球筋や軌道が読まれやすくなってしまいますし、疲れてくることでそれはさらに悪化してしまうでしょうから、実際にはルール変更前のようにいろんな人が投げるのではないのでしょうか。

Q. ノイズはペナルティなんですね。試合を見ていると、みなさんわざと足を鳴らしたり、声を出したり、ノイズをたくさん出しているように思いますが……？

A. 同じノイズでも、投球する選手の手からボールが離れるまでの間であれば許されるのです！ボールが投球される瞬間やその後は、みんな音を立てていないはずですよ。

Q. ノイズについても一つ。まるで自分が投球するかのようなフェイントのノイズを出す選手が多くて驚きましたが、さらにはみなさんそのフェイントを瞬時に見破って、本当のボールの方向を当ててしまいますね！どうして分かるんですか？

A 自分たちはいつも、相手がボールを投げってくる位置をサーチ（ボールの出所を探ること）をして、そっちに体を寄せているんです。それがちゃんと当たると、とても楽しいですよ。

さて、ペナルティを犯したチームにはペナルティスローが科せられるが、これは、ペナルティチーム側の守備を一人だけにしてからの相手側による投球である。9mにも及ぶゴールの前を一人で守らなければならないので、ペナルティチーム側は当然不利となる。パーソナルペナルティの場合は、その反則を犯した選手自身がペナルティスローを受ける一人となる。チームペナルティの場合は、ペナルティスローを投げるチームの選手が、その投球を受ける選手を相手コート内から一人選べる。ペナルティスローを受ける選手以外はコートの外へ出され、ペナルティスローを行うチームの3名のいずれかの選手が、インプレー時と同じように投球する。この際、守備側の選手がペナルティを犯すと、投球がゴールとならなかった場合のみ再度ペナルティスローが科せられる。ペナルティスローがペナルティとなった場合、そのボールはゴールにならず、ペナルティスローのセクションは終了、試合を再開する。

2. 5. 2 違反（インフラクション）

インフラクションを犯した場合、相手チームにボールの所有権が移る。参考として、インフラクションの主な種類を以下に4つ挙げる。

- (1) プリマチュアスロー：レフェリーの「プレイ」コールの前に投球した場合。
- (2) デッドボール：投球されたボールが相手プレーヤーに触れることなくチームエリアで止まった場合。
- (3) パスアウト：ゲーム中、味方にパスしたボールがコートの外へ出た場合。または、守備側の選手がボールに触れた後、意図的にボールをコートの外に出した場合。
- (4) ボールオーバー：守備をして跳ね返ったボール・ゴールポストやクロスバーに当たって跳ね返ったボールが、センターラインを越えるか、ニュートラルエリアのサイドラインを越えてコート外へ出た場合。

2. 6 レフェリーと競技補助員

どんなスポーツをする際にも欠かせないのが、その競技のルールを網羅しまた正確に適用することでゲームの進行をスムーズかつ見やすいものにする審判らの存在である。加えてゴールボールの場合は、選手が試合中一貫してアイシェードを付けているため、試合の様子を声や笛で分かりやすく選手に伝えることが求められているといえる。公式試合を行う場合、レフェリー（主審・副審）2名の他に、10秒レフェリー2名、ゴールジャッジ4名、スコア1名、タイマー1名の計10名の審判員が必要となる。レフェリー以外の者を競技補助員といい、公式試合ではこの補助員を「オフィシャル」とも呼ぶ。また、「審判」と言った場合は基本的にレフェリー2名と10秒レフェリーを指す。今回参加させていただいた練習試合では、ゴールジャッジやスコア、タイムの仕事などは全てレフェリーが兼ねて担当していた。

レフェリーのコールの例として以下のようなものがある。

- ・「クワイエットプリーズ」：試合中の静粛をその場の全員に求めるもの
- ・「プレイ」
- ・「アウト」
- ・「ラインアウト」
- ・「サブスティテューション」
- ・「ハーフタイム」
- ・「オフィシャルタイムアウト」
- ・「ブロック（ド）アウト」
- ・「ゴール」
- ・「チームペナルティ」

反則や違反の場合、行われた反則の名前か違反の名前もコールされる。

レフェリーはコールの他に吹笛（ホイッスル）を行う。その回数によってそれぞれ異なる意味が与えられている。試合開始は 3 回、ゴールは 2 回、そして、その他の状況、競技の中断・再開、タイムアウト、反則等やゲーム終了などにおいては 1 回と決まっている。

具体的なコールと吹笛の例を紹介する。

（例 1）ハイボール（ペナルティ）が起こった場合：

ホイッスル（ピー）「ハイボール」→選手ナンバーとその選手のチーム名をコール
→「クワイエットプリーズ」→ホイッスル（ピー）「プレイ」→ペナルティスロー

（例 2）ゴールした場合：

ホイッスル（ピーピー）「ゴール」→「ワン ゼロ」など得点が告げられる
→「クワイエットプリーズ」→ホイッスル（ピー）「プレイ」

（例 3）ブロックアウトののちにラインアウトになった場合：

ボールがチームエリアのサイドラインを出る→「ブロックアウト」→ボールがライン
アウトラインを出る→ホイッスル（ピー）「ラインアウト」→ボールがコートに戻される
→「クワイエットプリーズ」→ホイッスル（ピー）「プレイ」

コラム：Q&A の時間（3）

Q. ゴールボールは音が重要なスポーツなので、観客がうまく盛り上がれず、応援してもら
う際にジレンマのようなものがある、と聞いたことがあります、本当ですか？

A. そんなことはありません。確かに試合中はレフェリーが「クワイエットプリーズ」と
言っているように、静かにする必要がありますが、試合の合間には BGM をガンガン流して
いて、これが騒いでもいい合図です。ゴールした瞬間ももちろんワーッと盛り上がってい
いです。試合が始まって余計な音が消え、緊張感漂う時間とのメリハリがついていて、と
てもはっきりしたスポーツです。BGM を流すのは運営サイドのルールの一つで、世界的に
そうなっています。観客もそのルールに従って観戦するので、一体感が生まれ、とても盛
り上がりますよ。

Q. レフェリーが二人いますが、コールやホイッスルが被ってしまったりしませんか？

A. レフェリーは基本的にコートの対角に立って担当範囲を分担していますので、被りませ

ん。また、タイムアウトやサブスティテューションの際にレフェリーの意志でお互いの場所を交代したりもできます。ちなみに主審・副審とありますが、主審の方がえらいというわけではないです。

Q. 試合中、「アウト」「ブロックアウト」「ラインアウト」などボールアウトの種類が多くて混乱してしまいました、それぞれ詳しく教えてください。

A. 「アウト」は、ボールが投げられてから誰も触っていない状態でサイドラインを出ること。「ブロックアウト」は、ボールが投げられ、それを守備側が触った（ブロックした）後でサイドラインを出ること。ちなみにブロックされたボールがニュートラルエリアのサイドラインから出る場合は「ボールオーバー」で、直ちに違反となります。

「ラインアウト」は、「アウト」と「ブロックアウト」それぞれによってサイドラインを出たボールが、そのままラインアウトラインも出た場合のことで、このときボールは守備側に渡ることになっています。「アウト」「ブロックアウト」の場合、タイマーが停止しないため、ペナルティであるテンセカンズに関わってきます。そこで、早くボールを拾いに行き10秒以内に相手に投げ返すか、ラインアウトでタイマーを止めなければ！となるのです。違反であるパスアウトが起きるのもそういう理由です、意図的にボールを外に出してでも、ペナルティになるのは避けたいですからね。

3. ゴールボール体験記（潮）

今回ゴールボールを体験させていただくにあたって、私は2012年パラリンピックのことを思い出していた。当時偶然見ていたテレビで初めてゴールボールの存在を知り、目隠しをして床を動き回りながら音だけを頼りにボールを操る選手たちに驚いた。「こんなすごい人たちがいるのか」と、ゴールボールにもパラリンピックにも一気に興味が湧いた。興奮したまま眠りについた翌日のとある大学入試で、偶然、パラリンピックのことが問われた。そんな個人的な思い出もあって、今回実際にゴールボールをさせていただけることがとてもありがたく、楽しみで仕方がなかった。

まずは守備の方法やボールの投げ方についてご指導を受け、その後何度か練習試合に参加させていただいた。私はこれまで別の機会ですラウンドテーブルテニス（STT）やフロアバレーボールを体験したことがあったため、目隠ししてスポーツをすることに不安などはあまりなかったのだが、実際にやってみると、ゴールボール特有の目隠し効果を感じた。



写真5：守備の際の体の伸ばし方をご指導いただいている様子。

まず、床に座ってみると、コートが想像以上に広い。相手チームの三人がはるか遠くにいるように思えて、一生懸命ボールを投げても減速しているように思える。ゴールに入れることはおろか、相手チームのいる場所に到達しているかすら分からない。かといって投球に力を込めすぎると、ボールはスイングして思わぬ方向に一直線で向かってしまい、試合以前の問題となる。投げ方の癖もあって、何度もゴールより斜め右にボールを飛ばし、ひ



写真6：巨大なゴールポストを一人で守るイメージ。手足をもっと伸ばす必要がある。

どいときは体育館からボールが出て行ったりもした。アウトを連発しながらも、横についていただいた選手からのフィードバックを頼りに、自分は今どこを向いているのか、どんなボールの投げ方をしているのか、どこを狙っているのかなどを意識して、少しずつ投球に慣れていった。最後の練習試合の際に、一度だけゴールすることができ、場の雰囲気ですれを知ったときはとても感動した。この感覚がきっとやみつきになるのだろう、と思われるくらい気持ちのいいものだった。

ボールを投げた後は、すぐに守備に頭を切り替えなければならない。まずは自分がどこにいるのか、オリエンテーションラインを触って確認する。このラインを触るとすぐに自分の居場所が分かり、安心することができた。ただ、サイドラインと混同して一人慌てふためくこともあった。そして相手の動きに耳を澄まして、ボールが自分に向かってくるタイミングに合わせて身体を伸ばす。相手を遠くに感じているので、相手の投球の瞬間がつかめない。また投球したことが分かっても、どっちに向かってきているのか、ボールがこちらに近づいてみないと予測ができない。音がどんどん近づいてくる緊張感と戦いながら、ベストな位置に移動し、身体を伸ばしてゴールを死守する。そんなことの全てが一瞬のうちに起こるので、気を抜く暇はない。気持ちだけが向いていても身体がついてこないし、逆に身体だけむやみに動かしていても全く意味がない。本試合ではテンセカンズのルールもあるので、さらに忙しいだろう。身体を伸ばす際は、自分の身長が分かっていると、ボールに手足がちゃんと届かない。またぎりぎり届くくらいでは、ボールの勢いが勝り、そのまま軌道を変えてゴールされてしまうこともあった。ゴールを守れたら守れたで、硬いボールが身体に当たって痛い。無意識にすぐ「いたっ」と言ってしまったが、他にそんな声を漏らす選手は一人もいなかった。飛んでくるボールを予測し上手くお腹でボールをキャッチできたときは、ドッジボールでボールをがっちり取れた時のようなうれしさがこみ上げたが、ボールがみぞおちに当たる衝撃で思わず「ぐええ」というまぬけな声が出してしまった。やはり誰もそんな声は出していなかった。

体験後に改めて選手らの試合を見ると、彼らの何気ない一つ一つの動作の裏に、本気で上手くなろうとする姿勢やそのための日々の努力を感じずにはいられない。例えば、身体を一回転させて勢いをつけてからボールを投げる「回転投げ」(写真7参照)。その投げ方をする選手らに言わせれば「投げやすい」そうなのだが、回転しなくても方向が分からなくなった自分からすれば、なぜコントロールを失ったり目が回ったり

しないのか不思議だった。他にも、チームメイトの傍を音も立てずにすいすい移動してボールを投げたり、コート内でのパス回しを当たり前のようにこなしたり、一貫して動きがとてもスムーズなのである。守備の際は、二人の人がまるで継ぎ目のない一本の棒のように連なってボールをはじいたり、魚が跳ねるようにボールに飛び込んだり（写真8参照）と、ほんの二時間の体験の間に何度も驚き、感動させられた。思わず「どうしてメンバーと衝突しないんですか？」と、ある選手に訊くと、「当たるの嫌でしょ」と笑って答えられた。「まるで見えているようですね」、と言うと、次は「見えてるんです」と笑っていた。冗談のように仰っていたが、本当にそうなのだろうと思う。相手チームのノイズに騙され



写真7：回転投げをする選手。ボールはまっすぐにゴールへ飛んでいく。



写真8：素早く横跳びで守備する選手。浮いている！（立っている選手は、練習のための補助）

ることなく瞬時に「右！」とボールの向かってくる方向を判断し味方に伝えたり、他の人がゴールを守ったらすかさず「ナイス！」と声かけをしたりと、チームプレイも輝いていた。ずっと試合を見ていると、ノイズの出し方が人によって違うことなど、選手一人ひとりの個性に気づけるようになるのも楽しかった。試合中は終始、選手の方々がまるで水を得た魚のように目に映った。

当日は選手・審判の方々ら全員が温かく、自然体で接してくださったお陰で、私たちもすぐに打ち解けることができた。その上、練習終わりの軽

い「打ち上げ」にも同行させていただき、本当にたくさんお話させていただいて、この日は私にとって忘れられない一日となった。この拙い文章でゴールボールの魅力が最大限に語りきれているとは思えないのが残念だが、確かにいえることは、ゴールボールが私にとって大好きなスポーツとなったことだ。京都ライトハウスで練習される選手と審判の皆さんが普段にぎやかな雰囲気の中でも真剣に練習されている様子を思い浮かべながら、ゴールボールの奥深さや面白さを少しでも感じ取っていただければ幸いである。

4. ゴールボール選手へのインタビュー

今回の体験と一緒にゴールボールをプレーしてくださった選手の方々七名と審判の方に、ゴールボールに対して抱いている思いなどを教えていただくインタビューを行った。時間の関係により、質問項目の数に差が生まれてしまったが、選手の皆さんにはそれぞれにとってゴールボールが持つ意味について必ず尋ねさせていただくことを念頭にインタビューを進めた。お話いただいている際の臨場感や、ご回答者一人ひとりで異なる雰囲気を残すために、いただいたご回答をそのまま載せている。なお、丸括弧はご発言の内容をインタビュアーが補ったものである。

4. 1 中村義弘選手

Q. ゴールボールをしていて大変だったこと・困ったこと・うれしかったことは？

A. (コートを作る) 準備がいつも大変ですね。

Q. 体調などによって音などの捉え方は違ったりするのですか？

A. そうですね。特に風邪なんか引くとね、鼻がつまるでしょ、ほんなら耳が聞こえにくくなったりするので、方向がぜんぜん定まらなくなるとかはよくあることです。

Q. あなたにとってゴールボールとはどんな意味がありますか？

A. 僕はかれこれ 20 年近くやっているんです。(日本) 代表の方でもずいぶん海外に行かせてもらっていて、人生かけてきたといったらオーバーですけど、僕はそういうつもりでずっとやってたんで。大好きなスポーツなので、是非みんなに知ってもらいたいな、というのが僕の夢です。

4. 2 崔久夏選手

Q. ゴールボールをしていて大変だったこと・困ったこと・うれしかったことはどんなことがありますか？

A. それは失点したときはねえ、困りました(笑) やりだして、試合で失点したときは、みんなに迷惑かけてねえ、と思いました。

Q. どのようなきっかけでゴールボールをされようと思ったんですか？

A. 先輩の中村さんに誘われて。

Q. どれくらい長くされている？

A. 正味、真剣にやりだして二年ですね。

Q. あなたにとってゴールボールとはどんな意味がありますか？

A. 今は生きがいですね。うまくなりたいと思ってやっています。(アイ) シェードをつけたときはみんなと同じ条件なのでね。常はちょっとでも弱視なんで見えているけれど、このシェードをつけたときはみんな平等な中でプレーしているから…他の視覚障害者の競技の中でも、ゴールボールはみんな平等の競技やと思ってます。

4. 3 高瀬真依選手

Q. あなたにとってゴールボールとはどんな意味がありますか？

A. え？えー…どんな意味…忍耐鍛えるもんですかね（笑）いや私ね、始めたころって、ほんとに弱かったんですよ、いろんな意味でね。で、ここにいる人たちがすごくこう優しく育ててくださって…すごく強く育ててくださったなあと思って。まあ今でもいろいろ悩むことはあるんですけど（笑）私バレーとゴールボールやってるんです。バレーの方は本当に生きがいですけど、ゴールボールは本当に忍耐とその体力づくりさせてもらったかなって、思いますね。いろんな意味でほんとに強くしてもらったので、ほんとこの人たちには感謝しかないです。

Q. ゴールボールされるようになったきっかけは？

A. 先ほどいらっしゃった先生いますよね？あの先生が盲学校の先生で、私が盲学校の生徒だったんですよ。それで、まあバレーもそうなんですけど、「お前社会人のこういうスポーツあるけどやってみいひんか」って言ってくださったんですよ。でそこから、体育館でボール投げるようになってたりして、でそこからですね。高2から始めてるからもう8年ですね。でもここまで、こんだけ長いことやってもここまでしか上手くなってないから、いつもそれはすごい思うことですね。まだ、この年月でまだここまで、って。

Q. 学生から続けて、今はお仕事で、変わったことは？仕事との両立などは大変ではない？

A. すごくこう息抜きになってるので、んーなんかもう私の中で一週間の流れ…なんかこう、ゴールボールが木曜日にあるからあと三日、みたいな。今土曜日仕事なんですけど、仕事って言うかシフトなんですけど。だから、そうですね、まあでも学生の頃は後一日行けば休み、とか、そんなかんじで、結構私の中でリズムになってるので、全然そんな苦にはならないですね。息抜きだし楽しいんで。今はそういえですけど（笑）

4. 4 橋詰伸明選手

Q. ゴールボールをされたきっかけは？初めてどれくらい？

A. きっかけですかー、きっかけは、学生の時に先輩に誘われて始めました。今は、10年目とかですね。はい。えー、ちょっと待ってくださいよ。高1からやってるんで、15からなんで、で今25なんで、もう10年目とかですね。9年やってると思います。

Q. 今は仕事されているので、昔との状況が違うと思いますが、仕事との両立は？

A. そうですね、まあ夜が結構遅くまであるんで、忙しいのは忙しいですけど、でもやっぱあの、上手になりたいというか、強くなりたいので、そこはもう気にしないです。

Q. ゴールボールのどこが好きとかありますか？

A. えへへ（笑）これ、みんなが聞いているのが、すごい恥ずかしいんですよ（笑）みんなが、聞いているの（笑）（「気にすんなっ」と隣から他の選手の声。）ゴールボールの好きなどどこですか？すごく単純な競技なのに、やればやるほど、奥が深いところですかね。

Q. あなたにとってゴールボールとは？

A. 僕にとってゴールボールですか、そうですねー、あの一、今も、その僕出身が岐阜県なんですけど、その岐阜の子たちとチーム組んだり、あとは大学で東京に行った時も東京でそのゴールボールやったり、この京都に来て、京都でこうやってゴールボールさせてもらったり、すごく、こう、ゴールボールの競技を通じていろんな人とつながれることが、すごく僕は、このゴールボールをやっていて、幸せを感じます。

4. 5 寺西修二選手

Q. ゴールボールとはどんな意味がありますか？

A. 社会勉強というか。そんな、ほんと、なんか、いろいろ。社会勉強っす。

Q. 木曜日はもう勉強できないみたいな感じですか？

A. そうですね、まあ。（帰ってもう寝る）もうそんな感じっすね。でも結構疲れますね。

（試合後みなさんが汗をかいていることに関して）そうですね。練習した後に、ちょっとお酒を飲んだらすごいおいしいんで、ちょっと勉強できる感じじゃないですね。一寸の量で、すごい酔える。どんなためにやっとならなくて感じですが。

Q. 体力になっているのでは？

A. そうですね。（やっているのとやっていないのでは）やっぱ全然違いますね。これ目標で鍛えてたりもするし。

Q. 回転投げは、ふらふらしない？

A. いや、僕も正直まだできないんで。そうですね。（慣れた人ができる）と思いますね。あの、やっぱ下半身がある程度どっしりしとらんと、難しいと思いますし。そうですね、ほんとに僕は真ん中ばかりやらしてもらってるんですけど。

Q. ポジションによっても違う？

A. そうですね。あの、左右の人は投げるのが、も、仕事なんですけど、真ん中はもうほとんど守る、がメインでやるかな。

Q. 真ん中だと、両端の人に気を遣うとかありますか？

A. ありますね。もう、未だに全然僕はできてないので。その、なんというかな。（体を伸ばしきれないとか）ありますね、逆に、その伸ばしていきすぎて、例えば、右頭にして寝たら、顔を蹴られるとか、まあ自分から当たりに行つとるような形にはなるんですけど。ちょうど足があたりするんで。左寝たら、顔蹴ることになるし。そうですね、人によって全然守備範囲も違いますからね。やっぱ。後は、横に跳ぶ幅とか。背低くても、すごい跳ぶ人もおるし。

Q. 得意技はありますか？

A. 得意な技ですか（笑）ノイズじゃないけど、技っていうほどかわかんないですけど、声で味方の位置を、こう消すっていうか、ボールを左右に移動して投げるときに、なんか騒いで、直前まで騒いでみたいなのは。

Q. いろんなパターンありますが、特に好きなのはありますか？

A. （笑）、僕はそうですね、なんかバタバタってやって、さも俺が投げるみたいな足音を出す。球投げれんでも、音だけは一人前に出せるんで。ほんと、でも、すごい、小技がいっぱい。あんなざっくりしたスポーツなんですけど、みんな小技を持ってるんで。ちょっとでも盗みたいなって思ってますね。

4. 5 富田晋作選手

Q. ゴールボールをされたきっかけは？初めて何年ですか？

A. あ、同僚に誘われて。2002年から。えーと、まあ、そんなん、そんなん。

Q. 初めて大変だったことは？どういったことが楽しい？

A. （大変だったことは）なんにもない。（楽しいことに関して）あ、なんか、あの一、すごい人がいっぱいいるんだと。あの自分より、すごいこの、目見えへん同じ土俵で、彼がいて、世界にすごい外国人がいて、あー俺より上の方がいっぱいいるんやってことが、もう喜びというか、もう、そういう人に会えるというのが。

Q. 回りながら投げる意味は？

A. あ、いまさらないと思います。たぶん（練習の賜物）。回って投げる理由は、走って投げると、一旦ボールがこう行った時に、チャリンてなるんです。ほしたら、ボールの出所が分かるんです。回ると遠心力で、フーンというだけで、ズドーンといけるから、ですね。それだけですね、メリットは。いや、多分、走ってズドーンの方が速いと思います。ただ、速いボールが速いっていうんじゃなくて、速く聞こえるボールが速いんですよね。

Q. 怪我したことは？

A. ゴールボールで？ゴールボールで大きい怪我は、僕はしたことないと思います。いや、あるある！（笑）喉がいがんで…のどぼとけが、のどぼとけが、横にずれたとか。一回ありますね。それは、ボールが当たったんだと思いますけど。いや、声がちょっと出なくなっただけですね。

Q. 目標、モットーは？

A. 手を抜かない。ゲームをしてるときもそうですけど、空間にいる間、あの、誠心誠意、やりたいというか。人と人との、その接するのでもそうやし、メールにも書いたけど、休憩時間でもそうやし、この時間もそうやし、宝物のような時間やから。誠心誠意ふるまいたい。

Q. ゴールボールを続ける意味とは？

A. えへへ（笑）それはね、そんなに大きい意味はないかもしれない。あの一、だから最初のすごい人間に会えるっていう、その能力の高い人間を目指したいし、自分もそうなりたいて思うと、この業界にいと、すごい人がいっぱいいるから。うん。上を見続けられるっていうのは、そう思います。

4. 6 山本祐介選手

Q. いつくらいからやっていた？始めてどれくらい？

A. そうですね、僕、高校を卒業したとき、鳥居寮というところに入って、生活訓練をやっていて、その担当の新居さんっていう、今日審判をやってくれはった職員さんに、ゴールボールを紹介してもらって、始めました。始めて、もう今年で4年目です。丸3年過ぎましたね。

Q. やっていて難しい事は？

A. 最初は、ボールを取るとき、その出るタイミングが難しかったですね。（3人いるから誰が行くかとか）そうですね。場合によっては、聞こえない球もありますから。（突然きたらびっくりしますね）そうですね。

Q. やっていて楽しい事は？

A. 楽しいのは、こう、いろいろな方たちとチームを組んでやることですね。大会に行くと、そのもちろんいろんな人と出会えたり。

Q. 大会は出てる？

A. そうですね、今年は初めて日本選手権という大会に参加をしました。もう来月、近々選手権はあります、はい。それに私は初出場です。

Q. 練習する時に、レフェリーが数字を言ってくれるが、勉強になる？

A. あ、次どこ行ったとか、それを言ってもらえることで、今ここ行ったんだと、次はどこに投げようかなということを考えながら、投げられますね。それは分かりやすいです。

Q. やめたいなって思ったことは？

A. やめたいなって思ったことは、それは、あんまり考えたことはないですね。それはもう、楽しいから。こうゴールボールをやってるおかげで、友達（の輪）も広がって、出会いや、仲間がたくさんできて、とても楽しいスポーツです。僕は実はあの、中学上がってから同級生がいなかった状態だったんですが…中学2年生の時、あともう周り高校生だけで、中学生が僕ひとりっていう。（年上の人）ばかり。ちょっと孤独な面もありましたけど、いい仲間に恵まれて。僕も、最初は人見知りで、緊張がすごかった。一応みなさんに、チームメイトのみなさんに引っ張ってもらって、こう、上手にできるようになりましたね。

Q. 練習中気を付けてることは？

A. そうですね、あの、声を出したり。例えば、仲間の選手が点を取ったら、一緒にわーってこう盛り上げよう。一緒に喜んで、試合を盛りあげようって。盛り上げて、こう楽しい試合にしようっていう。（楽しむことは重要ですね）はい、そうですね。

Q. 最後に、ゴールボールってどんな意味がある？

A. そうですね、出会いの場…こう仲間たちとも出会えたり、ライバル、試合では仲間であったりライバルであったりします。だからもっとうまくなりたいという気持ちは強

いです。

4. 7 新居義徳審判

Q. そもそものきっかけとしてどうして審判をしようと思われたのでしょうか？

A. ここの職員なんでね、ライトハウスのね。今は異動で変わったんやけど、前の仕事は途中で見えなくなった人のリハビリで杖ついて歩いたり点字読んだり、音声ソフトのパソコン使ったりとかを指導する仕事をして、で体育なんかも授業していて、ゴールボールっていう視覚障害者のスポーツがあるって知って、そこから関わりを持ってやるようになったんやけど、まあ地元のチームの指導もしなくちゃいけないし、で指導する上でルールも知らなくちゃいけないし、で今日も僕レフェリーっていうか審判やってたんやけど、あんな形でアドバイスもしながらいわゆる笛、レフェリーもしないといけないので、それを覚える必要があったのと、自分でもちゃんとルール覚えなきゃなってことで昔に講習会とか受けたんですよ。で、今はねちょっと立場が変わって僕はもう審判一本でやって、海外にレフェリーをしに行ったりしてるんですね。で、北京パラリンピック・北京オリンピックが 2008 年あったときまでが僕、代表のコーチだったんです。さっきの中村さんとかも代表の選手やって、一緒にやってたんですけどね。代表のコーチを外れて、そっからもともと国際審判の資格を持ってたから、日本人でもパラリンピックとかに行くと世界選手権とかでレフェリーができる人たちがいないといけないから、それであのそういうレフェリーの方に専念して、今やってます。

Q. 長いことやってらっしゃるんですか？

A. そうねえ、一番最初ほんまのボランティアで関わったところからいうたら 20 年弱くらいになるかなあ。

Q. されてる中で指導もそうですしレフェリーもそうですが、どういうことが一番大変ですか？

A. 大変…でも一番大事なのは、大変というよりも大事なのは、視覚障害者の競技だということ。で、ゴールボールは全員アイシェードしちゃうから、見えないでしょ。で他の競技、例えばサッカーでも、あのテレビなんかでよく観るブラインドサッカーなんかは、全員アイマスクしてるけど、サッカーでもクラスが分かれてて、こうやってつけてるのは B1 と呼ばれるクラスで、あと B2・B3 っていう、ちょっとみえる結構見える、っていうまあそんなクラスがあるので、視覚の優劣で競技力が変わったりするんです。障害者スポーツは結構そこ大きくて、身体障害、例えば上肢・下肢とかの障害でも、肘から先がないのと、肩から先がないのとで全然その競技力も変わってくる。ゴールボールはそれがない。その代わり一切見えないので、いかにこうイメージができるように伝えるかですよ。僕はあの番号言ってたんですよ。あれはちゃんとルール決めて、はしっこからここまで 9m あるから、50cm 区切りで一番端が 0、左端から向かって 0、0.5、1 っていう一つと番号振ってるんです、頭の中で。それを選手にフィードバックしてる。今

投げたボールはそこに行ったよってことね。

Q. それはオリジナルですか？

A. 代表チームもやってることで、まあ全国でやってることですね。なんでもそうでしょ、そのほら、スポーツでも何でも、フィードバックってすごく大事やし、それは対視覚障害に関して言えばもっとすごく大事ですよ。自分で確認が取れない分を周りの見えてる人間とかがフィードバックをする。それを声で、言葉で説明をするっていうところが大事やし、なかなか難しいところだとは一番思います。そこが一番だと思います。僕たまたまそういう視覚障害に関わる仕事をしているから、常にそういう接し方をね、してるから、僕にとってはまだ慣れてるほうなんですよね。でも、それがその例えば慣れてない人だったりすると、よく言う「あっちやこっちやって言われたってわからへん」っていうところとおんなじで、あの審判しててもそこはすごく大事やなと思っています。

5. おわりに

この研究報告を作成するにあたって終始意識していたことは、これを読んだ方がゴールボールを実際にやってみたくなるようなものを作ることであった。そこで、ゴールボールの歴史などにはあえてあまり触れず、競技をする上で避けて通れないゴールボールのルール（2節）や、実際に初めてやってみるとどうなのか（3節）、また取り組み続けている選手がどう感じているのか（4節）をその内容とした。2節ではできるだけ詳細に、しかし分かりやすく記載することに努めたが、ルールブックの内容を全て説明することはできていない。またルールは4年ごとに見直されるため注意されたい。3節と4節からは、京都ゴールボール協会の一員である選手と審判の方々が真剣に、楽しくゴールボールに取り組まれている雰囲気が伝わるように気を配った。しかし、本当にその場の空気を知りたいと思われたのであれば、実際に自分の目で見、体験していただくことをお勧めする。また後日、審判の新居さんを通じて、参考文献（2）にあげたルール集の日本語版冊子を購入することができた。ゴールボールに興味を持たれた方は、京都ゴールボール協会（メールアドレス：kgba2009@gmail.com）または、日本ゴールボール協会（参考文献（4）参照）まで連絡を取ってみたい。

繰り返しになりますが、中村さん、富田さんをはじめとする選手の方々、審判の新居さんには、今回このような機会を与えていただき、研究発表としてまとめさせていただけたことに心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

注釈

- 1) 大会の結果については、参考文献（6）を参照した。
- 2) 体験・インタビュー日時：2015年10月29日（木曜日）17時～21時、場所：京都ライトハウス、参加者：溝口・潮（いずれも執筆者）。執筆は、4節を共同、残りは潮が担当。
- 3) 大会の概要については、参考文献（7）を参照。

- 4) 男子・女子チームそれぞれがその日本一をかけて争う大会。2014 年度の同大会の様子については、参考文献（8）を参照。
- 5) ゴールボールの公式試合に用いられる正式なコート。図 1 は、参考文献（3） p.6 を一部改変（日本語訳と補足）して作成したものである。
- 6) 当時の試合状況について書かれた記事として、参考文献（9）などがある。

参考文献

- 1) International Blind Sports Federation 公式ホームページ（2015 年 10 月 15 日アクセス）<http://www.ibsasport.org/>
- 2) International Blind Sports Federation. IBSA Goalball Rules 2014-2017.（2015 年 10 月 15 日アクセス）
<http://www.ibsasport.org/sports/files/391-Rules-IBSA-Goalball-Ruls-&-Regulations-2014-2017-v.1.05.pdf>
- 3) International Blind Sports Federation. Goalball court line markings (May 2015).（2015 年 10 月 15 日アクセス）
<http://www.ibsasport.org/sports/files/478-General-Goalball-Court-Line-Markings-Template.pdf>
- 4) 日本ゴールボール協会公式ホームページ（2015 年 10 月 15 日アクセス）
<http://www.jgba.jp/index.html>
- 5) 日本障害者スポーツ協会ホームページ（2015 年 10 月 15 日アクセス）
<http://www.jsad.or.jp/>
- 6) International Paralympic Committee. London 2012 Paralympic Games Goalball Women.（2015 年 10 月 15 日アクセス）
<http://www.ibsasport.org/sports/files/209-Results-Goalball-London-2012-Paralympic-Games-results-women.pdf>
- 7) 日本ゴールボール協会「2015 IBSA アジア・パシフィック選手権大会（リオデジャネイロパラリンピック アジア/パシフィック枠決定戦）」（2015 年 10 月 15 日アクセス）
<http://www.jgba.jp/files/2015IBSAapgaiyou.doc>
- 8) 瀬長あすか「日本ゴールボール選手権大会は、スーパーモンキーズ（男子）と MIX（女子）が優勝！」（2015 年 10 月 15 日アクセス）<http://masports.jp/summer/goalball/5708>
- 9) ロンドン＝読売取材団「ゴールボール女子、初の決勝へ…『銀』以上確定」（2015 年 10 月 15 日アクセス）
<http://www.yomiuri.co.jp/olympic/2012/news/paralympics/1/20120907-OYT1T00186.htm>

視覚障害と体育教育：1878-1925

服部 航史

1. はじめに

視覚障害とスポーツの関係を考えるとき、体育教育は歴史的な意義をもつ。なぜなら、日本において視覚障害者が積極的に体を動かす遊び・競技を行うためには、まず基本的な環境づくりが不可欠だったからであり、それを開始し、支え続けたのは体育教育だったからである。しかしながら、多様な視覚障害者スポーツが直ちに広まったわけではなかった。まずは養護・訓練性の高い遊戯や体操からスタートし、盲教育全体の進展と並行して、少しずつスポーツとしての運動の多様化が進んでいったのである。その意味で、京都盲啞院の開設から第一回関西盲学生体育大会の開催に至るまでの明治・大正期は、盲学生体育の成立期としてとりわけ重要な役割を果たした時期だといえる。

2. 体育教育の始まり：明治前期

明治 11（1878）年以前には、盲児に対する体育教育はほぼ存在しなかった。明治以前の児童教育は藩立学校か寺子屋で行われたが、藩立学校では障害児の入学そのものが受け入れられなかった。寺子屋では障害児の入学が受け入れられた例が存在するが、障害児との個人的関係から受け入れられたケースにとどまっていたのであり、体育的指導は存在しなかった（文献 1）。明治 5（1872）年に学制が公布され、盲・聾啞児を想定した「廃人学校」が規定されたが、これを受けてすぐに設立されたものはほぼなかった（注 1）。それまで当道座などの特権的組織の内部において独自の教育体制を築いてきた視覚障害者たちにとって、明治 4（1871）年 11 月の太政官布告による封建的特権の廃止は、新たな環境における盲教育の組織化を極めて困難にするものであった。

2. 1. 京都盲啞院における体育教育の理念と実践

日本において盲学校体育の先駆けとなったのは、明治 11（1878）年に古河太四郎（1845-1907）によって設立された京都盲啞院の体育であり（注 2）、やや遅れて明治 13（1880）年に東京で設立された楽善会訓盲院（注 3）とともに、明治前期を通じて日本の盲学校体育を牽引し続けた。この明治前期における盲教育では京都・東京の大都市校が先進校としての性格をもっていたのであり、そのことは体育教育にも当てはまることであった。

京都盲啞院における体育教育は、古河太四郎の独創的かつ実践的な教育理念に基づいて行われた。古河の教育観とは、教場を病室とみて、盲児の教育を患者に対する実践的治療に見立てるものであった（文献 2）。この教育観は、体育教育においては養護・訓練性の重視や健康に及ぼす姿勢の影響の強調として現れた。古河はそれまでの教育的実践の蓄積から、業間時間を利用して体育を行う期間を経て、それなりの自信をもって体育を教科へと導入したが、その実施に当たってはいかに盲児を集団として教育するべきかに苦心した。

この時期に考案された運動教材の代表的なものとしては、「方向感覚渦線場」「直行練習場」「打毬聴音場」があり、これらは方向・感覚訓練を目的としたものであった（注 4）。方向感覚渦線場は、風・太陽熱・看護人の声の方向を頼りに渦状のコースを歩かせるものであった。直行練習場は、折り返し平行のコースを歩き、風鈴のついたコースの縁にいかに触れずに歩行するかを競うものであった（注 5）。打毬聴音場は、屋台に備え付けられたそれぞれ材質の異なる標的に対してボールを投げ、鳴る音の違いに応じて感覚を鍛えるものであった（文献 3）。

これらの独創的な運動教材に加え、「鬼遊び」「大将遊び」「盲生体操」といった遊戯も存在した。「鬼遊び」は、十数人が手をつなぎ輪になって一人の鬼を囲み、各人が鬼に対して内側か外側を向き、この十数人が一斉に発した声を鬼が聴き、内側を向いている人をタッチするという遊びであった。「大将遊び」は、椅子に座った一人の大將の周りの各方向に二人ずつ哨兵を配置し、一人の敵が哨兵の周りを徐行して方角を認識した後、大將の発した声に対して敵が大將のもとにたどり着くことを試みるという遊びであった。「盲生体操」では、5人組で2本の長桿を用いて同じ体操をすることによって、運動に優れていない生徒も十分に運動ができるという工夫がなされた（文献 4）。これらの遊戯は巷の遊びを応用して盲児に集団的な運動を行なわせる工夫の凝らされた遊戯であった。

2. 2. 楽善会訓盲院における体育教育と地方校における事情

楽善会訓盲院の体育教育は、その実践については京都盲啞院の体育教育をモデルとした面が大きかった。その一方で、教育理念については人間的指導を強調する啓蒙的性格が強く、古河の教育方法を動物飼育と批判するほどであった（文献 5）。この時期大阪と金沢でも盲啞学校が設立されていたか、あるいはその動きがあったが、ほどなく廃止されることとなった（注 6）。明治 20（1887）年頃からは地方においても盲啞学校の設立が少しずつ増えていくこととなるが、以上のような経緯から、それらの地方校は京都・東京の両校に対して体育教育の分野でも後進校的性格をもたざるを得なかった。

3. 体育教育における環境整備：明治後期

明治後期以降の盲教育は公教育的性格を徐々に強めることとなり（注 7）、体育教育においても環境整備が進んだ。体育教育にとって専門の教員・設備は不可欠なものであるという認識が教育現場で強まっていったのであり、やはり京都・東京校において最も環境整備の成果が見られた。

3. 1. 法制度の変化

法制度の変化は盲教育の公教育的性格が強まりつつあったことをある程度示している。明治 23（1890）年に第二次小学校令が公布され、盲・聾啞学校について初めて規定された。明治 33（1900）年の改正小学校令では盲・聾学級（学校）が小学校に付設可能となった。明治 40（1907）年の改正師範学校規定では特別学級の設置が奨励され、地方における盲啞学校の増加につながる事となった（注 8）。しかしながら盲学校が小中学校と法律上同等

と認められるには、大正 13（1924）年の盲学校及聾唖学校令公布を待たなければならなかった。

3. 2. 京都盲唖院における財政危機とその後の体育教育

京都盲唖院は深刻な財政危機を乗り越えた上で体育教育の環境整備を進めることとなった。京都盲唖院は明治 20 年代に財政上の困窮から閉院の危機に追いやられ、古河太四郎も明治 22（1889）年に依願により辞職することとなった。明治 23（1890）年に市に移管されてからも院の財政はひっ迫していたが、二代目院長鳥居嘉三郎のもとでかろうじて再興し、その後は体育科教員岡本駒太郎の採用（1901 年）や徒手体操の導入など、体育教育において環境整備を進めることができる状況になっていた。さらに明治 33（1900）年 3 月には校舎全面改築工事が完了し、運動場や屋内体操場が備わった。

この時期の京都盲唖院の遊戯・体操教材としては、「綱引き」「回転塔遊び」「押し合い」「角力」「重物堤挙」「唖鈴体操」「器械体操」「柔軟体操」などが挙げられ、明治前期における教材と比べて多様になり、整備された環境を有効利用したものが増えたことがわかる。「回転塔遊び」は「回転ぶらんこ」または「旋回塔」とも呼ばれ、安全性にも配慮された遊具であった。「角力」は足腰を鍛えられる遊びであった。「唖鈴体操」は木唖鈴を用いて行われた体操であった（文献 6）。

3. 3. 東京盲唖学校（注 9）における環境整備

東京盲唖学校も明治 37（1904）年に東京高等師範学校教授可児徳を尋常科及び教員練習科体操教授嘱託として採用し（注 10）、明治 45（1912）年には雨天体操場を建設するなど、教員・設備の両面で整備を進めた。この時期の東京盲唖学校の遊戯・体操教材としては、「円形ボール送り」「円形行進」「綱引き」「棒押し」「棒体操」「球竿体操」「唖鈴体操」「徒手体操」「矯正運動」「平均運動」「跳躍運動」「懸垂運動」などが挙げられ（文献 7）、ここでも教材が多様化したことがわかる。

3. 4. 地方校における実情

このように、法制度や先進校において体育教育に関する一定の環境整備が進んだ一方、地方校では職業教育中心的な性格がいまだ強く、体育教育が行なわれる場合にも各校の事情に合わせて自主的に行われた面が大きかった。例えば明治 44 年（1911）年頃に千葉訓盲院が行なった運動会は、経営の行き詰まりに対する興業的性格をもったものだったのであり、社会の興味を引いて資金を集めることが主な目的であった。しかしながら、この運動会で行われた「綱を伝わっての徒競走」や「音を追いかけてのマリひろい」といった競技には、のちの鉄線走や音源入りボール・ゲームといったスポーツ種目に通じる要素も存在した（文献 8）。

4. 課外活動とスポーツ種目の漸次的増加（注 11）：大正期

大正期における社会的なスポーツ熱の高揚や、明治後期から次第に行われ始めて大正期に盛んとなった課外活動は、盲体育教育に一定の影響を与えた。社会的なスポーツ熱の高

揚をうけて盲学校内でも興味の持たれたスポーツが自然に行われ始め、次第に全校的な課外活動に取り込まれるようになる。さらにこれが学校行事としてのスポーツ大会へとつながり、他団体（学校）との競技も行なわれるようになったのである。この過程には、特に京都・東京の両校で校友会型の自治組織が関わっていた。大正 14（1925）年に開催された第一回関西盲学生体育大会は、こうした体育教育における自発性を伴ったスポーツの受容過程の、あるいは明治期に始まる盲学生体育全体の進展の一到達点として見なすことができる。

4. 1. 京都盲啞院における諸活動

京都市立盲啞院では、既に明治 38（1905）年に聾生徒が京都市立第一高等小学校の運動会に招かれており（文献 9）、大正 3（1914）年には運動会が行なわれ、その後行事化された。さらに昭和 30 年代後半から身体検査や遠足などが行なわれており、大正 4（1915）年には修学旅行が実施されるなど（文献 10）、課外活動・行事の両面において他校に劣らない動きがあった。

4. 2. 東京盲学校における諸活動

東京盲学校においては、責善会が課外活動において重要な役割を果たした。責善会とは東京盲啞学校校友会を前身とした組織であり、この校友会は明治 39（1906）年に責善倶楽部に改組していた。責善倶楽部は、昭和 43（1910）年 10 月に第一回が実施されてその後行事化した遠足にも関わっていた。やがて明治 44（1911）年に責善倶楽部は男子・女子に分裂したが、大正 3（1914）年に東京盲学校責善会として再び統一組織となり、大正 5（1916）年の第一回運動会では運営を主導する立場となった（注 12）。その運動会の種目としては、各種競争のほか「俵運び」や「行進遊戯」などが挙げられ、第一回のプログラムにおいて既に 20 種目もの競技が記載されていた（文献 11）。

4. 3. 地方校における諸活動

地方校においても一定の自治的活動が行なわれた。例えば名古屋市立盲啞学校では、大正 7（1918）年度から毎月の「健康デー」が定められ、学生の自発的な活動を促すために保健体育上の重要事項が指導・奨励された。その具体的内容は、身体検査、検診、衛生・修身講和、清潔・掃除、会食・苦話会、運動、活動写真・演劇観覧、敬老会など、体育の枠組みにとどまらず非常に多岐にわたった（文献 12）。

4. 4. 関西盲学生体育大会

大正 14 年（1925）年 10 月 11 日、点字大阪毎日毎日（注 13）主催の第一回関西盲学生体育大会が大阪市立盲学校運動場にて開催された。この大会には全国より 13 校 138 名が参加し、13 種目が実施された。その競技種目としては、「百米競争」「二人三脚八百米リレー」「幅飛」「砲丸」「綱引」などがあり、陸上競技と聞いて今日連想されやすい種目も含まれていた。この大会は翌年 11 月にも全国盲学生陸上競技大会として実施され、以後昭和 3（1928）年より全日本盲学生体育連盟主催のもとに毎年行われることとなった（文献 13）。

5. おわりに

日本の盲学生体育史において、スポーツと呼ばれる種目の実践が一定の多様性をもって行われるようになったのは大正・昭和期以降のことであったが、その土壌は明治期以来の体育教育の中で育まれたのであり、課外活動や行事においてスポーツの実践が進展する過程においても、常に体育教育がそれを支えていた。とりわけ（1）自発的に（2）体を動かすことを（3）楽しむ、というスポーツにおける不可欠とも言える要素は、養護・訓練性が強くスポーツとは呼びがたい古河流の体育教育においてこそ着実に育まれ始めたと言える。したがって、視覚障害とスポーツの関わりを考える上でも、明治期から大正期にかけての盲体育教育の成立期の歴史は無視できない意義をもつであろう。

注釈

1)明治9年から10年にかけて東京に存在した熊谷実弥による盲人学校は、この時期における現在唯一知られている盲人学校である（文献14）。

2)古河は、新池事件による2年間の徒刑を経て明治5(1872)年7月12日に出獄して以降、市中小学校の一枚である待賢小学校に復帰し、そこに成立した瘡唾教場で勤める中で、盲聾教育に関する一定の実践的経験を既に積んでいた。また、明治11(1878)年に開業した盲唾院は御池東洞院上る舟屋町の仮盲唾院だったのであり、翌年現在の京都府庁付近に本校舎が建設され、以後1937(昭和12)年の花ノ坊への移設までこの地で同校の教育活動が行なわれた。

3)楽善会は、明治7(1874)年に来日したスコットランドの宣教医フォールズ(1843-1930)の主導で、中村正直(1832-91)や古川正雄(1837-77)などの啓蒙家・文化人が参加して明治8(1875)年に結成された。しばらく政府援助の許可が下りなかったものの翌年3月にこれを獲得し、その後会務の停滞期を経て明治13(1880)年2月13日に授業が開始された（文献15）。

4)下図を見よ。図1から図6はすべて北野(1996)よりコピー・引用した（文献16）。

5)この直行練習場は、昭和8(1933)年に石川県立盲唾学校にその施設が設けられたことに始まる「鉄線走」と類似した要素を既に有していたといえる。

6)大阪では明治12(1879)年11月5日に大阪模範聾唾学校が府立として設立されたが、明治13(1880)年に府会で予算が否決され、廃止された。その後同校は私立盲唾学校として再び始まったが、明治25(1892)年頃廃絶した。金沢では明治13(1880)年から明治15(1882)年にかけて盲唾院設立の動きがあったが、経営上の理由によりほどなく廃止された（文献17）。

7)明治・大正期の盲教育において慈善教育が「克服された」という見方に対して、視覚障害者自身が様々な支援者・団体との協力のもとに盲教育を進展させてきたのだという見解が存在する。盲学生体育史の観点からも、とりわけ課外活動の幅が徐々に広がり始めた時期のことを考えれば、こうした見解に注意が払われるべきである。

8)特別学級設置の提案に従って 11 校の師範学校附属小学校が実際に盲・聾唖特別学級の設置などを行なったが、これらの学級は大正期前期までに財政ひっ迫の影響で次第に消滅した。しかし、その多くは民間の慈善団体などに移管され、盲唖学校として分離していたのである（文献 18）。

9)楽善会訓盲院は明治 17（1884）年に楽善会訓盲唖院に改称し、明治 20（1887）年 10 月には東京盲唖学校に改称した。その後明治 42（1909）年に同校は盲聾に分離し、一方が東京盲学校となった。

10)東京盲唖学校では明治 34（1901）年に既にアメリカ人ヘレン・ウィルラルド・メリットを体操教授に嘱託として採用していたが、その期間は 12 月 21 日から同月 31 日までの短期間であった。

11)大正期に課外活動が「本格化した」とは述べずにとどめる。というのも、大正期までは伝統的な徒弟制度の影響もあり、とりわけ部活動に関しては活発とは言いがたかったからである。しかしながら、遠足や運動会などの諸活動が地方校を含む各校である程度組織化されたことが、全国的な体育大会の開催につながる長期的要因となり、その後の部活動の活発化にも寄与したことは確かである。

12)責善会はその後大正 10（1921）年に「課外教授」と改称され、自主的性格から学校主導型の性格へと変わったとされる（文献 19）。

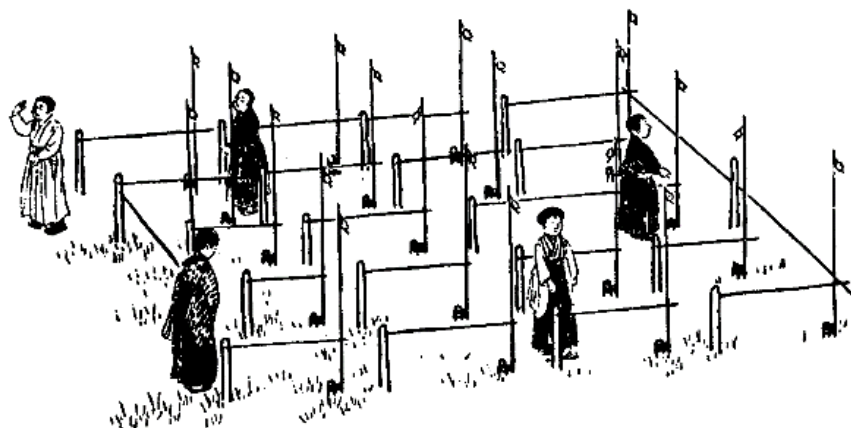
13)大阪毎日新聞社は大正 11（1922）年 5 月 11 日に『点字大阪毎日』を創刊して以後、盲学校生徒を対象とした事業を展開していた。大正 14（1925）年の大会もその事業の一環である。

図

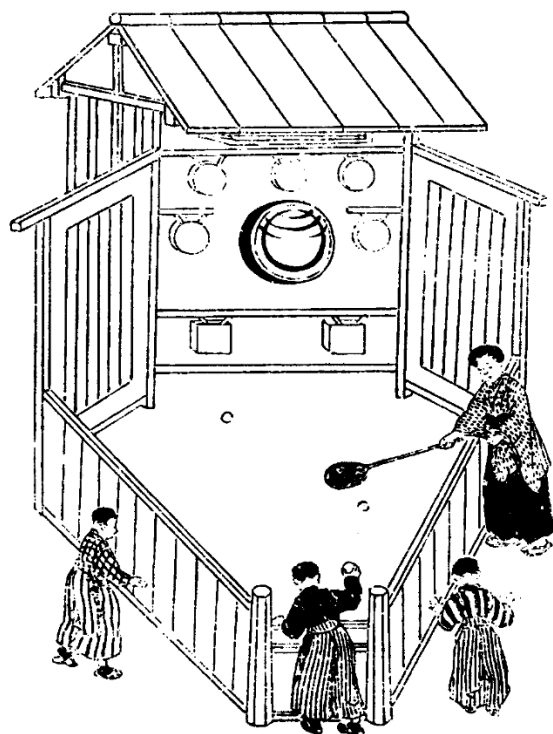
1)方向感覚渦線場



2)直行練習場



3) 打毬聴音場



4) 鬼遊び



5)大将遊び



6)盲生体操



参考文献

- 1)北野与一（1996）、『日本心身障害者体育史』不昧堂出版、18 ページ
- 2)岡本稲丸（1997）、『近代盲聾教育の成立と発展：古河太四郎の生涯から』日本放送出版協会、189 ページ
- 3)岡本（1997）、前掲書、181-182 ページ
- 4)北野（1996）、前掲書、25-27 ページ
- 5)北野（1996）、前掲書、31-32 ページ
- 6)北野（1996）、前掲書、43-45 ページ
- 7)北野（1996）、前掲書、50 ページ
- 8)北野（1996）、前掲書、56 ページ
- 9)北野（1996）、前掲書、55 ページ
- 10)北野（1996）、前掲書、49 ページ
- 11)北野（1996）、前掲書、52-55 ページ
- 12)北野（1996）、前掲書、57 ページ
- 13)北野（1996）、前掲書、60-62 ページ
- 14)岡本（1997）、前掲書、77 ページ
- 15)岡本（1997）、前掲書、77-78 ページ
- 16)北野（1996）、前掲書、24-27 ページ
- 17)北野（1996）、前掲書、20 ページ

18)北野（1996）、前掲書、39 ページ

19)北野（1996）、前掲書、54 ページ

視覚障害者スポーツにおけるクラス分け

渡邊 賢史

1. クラス分けとは

障害者スポーツにおいて特徴的といえる制度として、「クラス分け」がある。クラス分けとは、障害の程度によってどのクラスに属するかが決定され、そのクラスに従ったカテゴリーで競技を行う、というものである。把握し辛いという方は、男女という性別での区別をご想像いただきたい。たとえ同じルールの競技であっても、男子競技者と女子競技者という区分に別れていなかったら、能力的に有利・不利が生じてしまうのは想像に難くないだろう。同様に、障害が軽度の競技者と障害が重度な競技者では、有利・不利の差が発生してしまうのはどうしても避けられない。こうした差を克服するために、クラス分けによる区分が行われているのである。

当然、視覚障害者スポーツにもクラス分けが存在している。以下では、視覚障害者のクラス分けについて記述することとする。

2. 区分について

視覚障害者の場合のクラス分けには、全国障害者スポーツ大会規則で規定され日本でのみ用いられる国内区分と、国際視覚障害者スポーツ連盟(IBSA)の規定する国際区分の2種類(注1)があり、両方とも3段階(注2)で分けられている。具体的には以下の通り。

国内区分

- B1 視力が0～光覚弁(注3)
- B2 視力手動弁(注4)～0.03
- B3 その他(障害者手帳(注5)を保持していることが条件)

国際区分

- B1 視力0～光覚までで、手の形を認知することが出来ない
- B2 手の形の認知可能～視力0.03か視野5度までの、どちらか片方もしくは両方を満たす
- B3 視力0.03～0.1か視野5度～20度までの、どちらか片方もしくは両方を満たす

このような、数値での定義ではすんなりと理解しにくいかもしれないが、どちらの基準も基本的には次のように置き換えてもよいだろう。

- B1 全盲・光覚弁
- B2 弱視(光覚手動)
- B3 弱視

3. 二つのクラス分けについて

ここでは、前節で示した 2 種類のクラス分けの差異を纏めてみる。一見、両者の間にはあまり大きな違いはなさそうではあるが、比較するとその違いが浮き彫りになってくる。

先に国内区分の方に目を向けよう。この区分を用いる全国障害者スポーツ大会は、日本障がい者スポーツ協会(JPSA)や文部科学省が主催しており、国体終了後に同開催地で行われている。その源流となった全国身体障害者スポーツ大会(注 6)は、今からちょうど 50 年前の 1965 年に創始された。大会の目的には障害者の社会参加の推進や国民理解の深化が掲げられており、パラリンピックなどと比べ競技色が薄いと言える。そのため、国内区分は国際区分よりも裾野が広く、クラス分けも身体障害者手帳を基準とするだけで済む。

一方の国際区分は、競技としての視覚障害者スポーツにウェイトを置いていて、視覚障害者スポーツ競技の国際的大会(注 7)、特にパラリンピックなどに出場する上で欠かせない資格となっている。この区分を運営する IBSA は 1981 年に設立された、視覚障害者スポーツを専門(注 8)とする国際機関である。競技性を重視するこちらの区分では、大会の前日に厳密なクラス分けが行われている。審査を受ける必要のある競技者は事前に書類の準備等を済ませておかなければならない。この審査ではクラスとは別に、競技者が今後の大会で審査を受ける必要があるかを示すステータス(注 9)が付属して通知されている。

4. カテゴリー区分について

上記のように分けられたクラスがどのように競技のカテゴリー区分(注 10)に適用されるかは、その競技によってまちまちである。例を挙げると、陸上競技ではクラス区分がそのまま種目のカテゴリー区分となるが、柔道では競技者の障害の程度に関わらず晴眼者と同じように体重別で区別され全員同じ舞台で闘うことになる。

もう少し詳細な部分まで掘り下げてみよう。先述の通りカテゴリー区分は競技によって異なるが、クラス区分の適用のされ方から、次のように大きく 4 つに分ける(注 11)ことができる。

I クラス区分がそのままカテゴリー区分となる：陸上競技、競泳、ゴルフ等

II 第 4 のカテゴリーが設けられる：アーチェリー、テニス等

III 2 つのカテゴリーに分けられる：卓球、サッカー等

IV 全クラスが同一のカテゴリーに属する：柔道、スキー、フロアバレーボール等

おそらく、I は最もイメージしやすいと思われる。B1 の競技者は同じく B1 の競技者と、B2 の競技者は同じく B2 の競技者と、という風に同クラス内で勝敗を決定する訳である。

それに対して、II はいささか理解しにくいであろう。事実、第 4 のカテゴリーというのは先程までの説明と食い違っているように見えても仕方がない。この第 4 のカテゴリーと

いうのは、クラス区分で B3 より軽度とされた障害者(注 12)があてはまる。つまり、他の種目よりも多くの障害者に参加する権利が与えられているということになる。

Ⅲに関しては、視覚を使うか否かで 2 つのカテゴリーに大別される。ここで興味深いのは、B2 の競技者が B1 と B3 のどちら側でプレーするか、即ち視覚を使わないか・使うかが、種目によって異なること(注 13)だろうか。

さて最後のⅣであるが、実はこのグループこそが全種目の半数以上を占める最大のグループである。このグループは、ノン・アイシェード型、アイシェード型、係数型、役割分担型というように、更に 4 つの型に細分化できる。順を追って解説する。

ノン・アイシェード型は全クラスが同条件で競い合うタイプで、柔道や射撃がその代表例として挙げられるであろう。

アイシェード型は、その名の通り全員がアイマスク・アイシェードなどを装着し、視覚を制限した上で競技を行う。ゴールボールなどがこれに当たる。

係数型では、クラス毎に係数が設定され、競技者の出した記録にその係数を掛けた修正記録で勝敗が決定される。スキー競技で採用されている。

役割分担型は、フロアバレーボールなどに代表される、全盲者と弱視者でそれぞれ異なる役割を担い共に競技に参加する方式である。

5. 問題点・課題

まず、クラス分けの区分が 2 つ存在することが挙げられる。例えば、「手動弁」という国内区分の基準は国際区分に対応させにくいし、国内区分で視覚障害者スポーツに参加できても国際区分ではどの段階にも入れない(注 14)という人もいる。異なる目的で作られた制度であるため仕方ないことではあるが、競技者の混乱を招く要因になっているのは否めない。国内区分を国際区分に統一することが手っ取り早い解決法かもしれないが、それでは国内で元々参加していた人を閉め出す結果になってしまう。両者を巧く統合するのは難しくはあるが、取り組むべき課題だと考えられる。

また、カテゴリー区分にも課題は存在している。元々クラス分けが導入されたのは、障害の軽重による不公平をなくすためであったのだが、中には公平性が保たれていないような事例(注 15)も散見される。こうしたクラス分けについての問題点は、障害者スポーツ界全体が直面している課題でもあり、その解決のため「機能的クラス分け(注 16)」という考えが導入されている。機能的クラス分けは、一様に障害の種別でのみクラスを分けるのではなく、その競技に必要となる運動機能を評価してクラスを分けるという方法である。競技特性を踏まえたクラス区分・カテゴリー区分をするという考えは、視覚障害者スポーツにおいても有効であるように思われる。

6. おわりに

このテーマを研究するまで自分の中では、視覚障害者スポーツと言ったら、アイマスク

などを着用して条件を揃えるようなものが大半だと思っていた。しかし蓋を開けてみると、思いの外に視覚障害者スポーツは多様な形態を取っていたことに驚かされた。そして、その多様さの礎となっているクラス分けという制度には、障害者スポーツに関わる上で避けては通れない要点があった。障害者スポーツにおけるクラス分けは、競技性だけのためではなく、その競技に参加する皆が楽しめるような基盤を作るためでもあるのだ。万人に平等なクラス分けは存在しないかもしれない。しかし少しずつではあっても、楽しめる人がだんだんと増すようなクラス分けになっていくことを願っている。

注釈

- 1)国内区分、国際区分という名称は便宜上のものである。
- 2)どれにも属さない人は、NE(不適格)とされる。
- 3)光覚とは、明暗がわかるということ。
- 4)手動とは、眼前の手の動きが認知できるということ。
- 5)身体障害者福祉法で定められた身体上の障害を持つ人を対象に交付される。
- 6)1992年にはもう一つの前身である全国知的障害者スポーツ大会が創始され、2001年以降は統合されている。
- 7)日本選手権大会など、日本国内で開催される大会でもこの国際基準を適用している所が多い。
- 8)日本ではまだ、視覚障害者スポーツ専門の機関は成立していない。
- 9)ステータスには、「Confirmed」と「Review」の2種類がある。前者は、今後視覚が変化することがないと判断された競技者に付けられ、それ以降はクラス分けの判定を受ける必要が無いことを意味する。後者は、視覚が変動しうるとされた選手に付けられ、ある決まった期間後には審査を受け直す必要が生じる。
- 10)実際には種目によってカテゴリーの名称は異なるが、ここでは考慮しないものとしている。
- 11)この分類は、佐藤の論文での分類に従っている。
- 12)どの程度が上限となるかは競技次第である。
- 13)例示すると、B2競技者は、卓球ではB1側の競技に参加するが、サッカーではB3競技者とともにフィールドに立つことになっている。
- 14)国内区分の上限となるのは「一眼の視力が0.02以下、かつ他眼の視力が0.6以下で、両眼の視力合計が0.2を越える」という基準(身体障害程度等級6級)であるが、これは国際区分の上限を超えた範囲である。
- 15)ボウリング競技(本稿での分類はカテゴリーI)では、B2競技者の中でも、手すり(ガイドレール)を用いる必要がある人は、用いる必要がない人より平均得点が約50点も下回っていた。
- 16)当初は、クラス分けは医学的見地からなされていた。しかし、パラリンピックなどが発

視覚障害者スポーツの歴史と今

山根 匠

1. はじめに

障害者スポーツの歴史は古く、遡れば古代ギリシャ時代にリハビリテーションの一環として障害者が運動を行っていたことが記録されている（文献 1）。しかし競技的性格の強いいわゆる近代スポーツと障害者との積極的な関係は、19 世紀の終わりになってようやく端を発する。また大会などの組織的な実践となると、その端緒を見るには 20 世紀に入るのを待たねばならない。こうした決して長くはない歴史の中で、視覚障害者スポーツは、特に日本において、障害者スポーツ全体の潮流と並行し、時に先導しながら展開されてきた。

以上の事項を念頭に置きつつ、本稿では主に 19 世紀以降の日本における視覚障害者スポーツの歴史を概観する。そしてそれらの歴史的展開を踏まえたうえで、最後に現在の視覚障害者スポーツの全体的な在り方を検討することを狙いとする。

2. 視覚障害者スポーツの歴史

本章では、20 世紀までの視覚障害者スポーツの歴史を、日本を中心に概観する。そのために、時代ごとの特性に応じて前期（19 世紀～戦後）、中期（戦後～80 年代）、後期（80 年代～2000 年）と便宜的に大別する。

2. 1 前期——学校体育としての視覚障害者スポーツ

2. 1. 1 明治以前

明治期以前、すなわち江戸時代までの日本における視覚障害者は、伝統的に諸外国および他の障害と比較して、相対的に優遇された地位を得ていた。その背景には琵琶法師の活躍や鍼、灸、按摩といったある種特権的な職の存在がある。江戸中期に入るとその傾向はさらに顕著になり、盲人たちは「たくましく成長」し、「黄金時代を展開」したのである（文献 2）。

教育においては、障害者が健常者と同等の資格と地位を獲得していたとは到底言えないまでも、一部の寺子屋で障害者の受け入れを行っていた。しかし寺子屋での教育は主として「読み・書き・そろばん」の技能の会得を目的としており、体育が障害児に対して体系的に指導されることはなかった（文献 3）。したがって視覚障害者スポーツの黎明は、明治に入り日本が西洋の文化と精神を取り入れてからということになる。

2. 1. 2 視覚障害者スポーツの黎明と盲学校における体育教育

明治政府の成立は 1868 年であるが、そのわずか 1 年後、浅草奥山にて盲人による相撲が興行される（文献 4）。まだ障害者と体育との結び付きが見出されなかったであろう時代に、その始まりとして相撲が選択された理由はいくつか考えられる。1 つはポピュラーかつ伝統のある国技であるということ。そしてもう 1 つは「競技をするための場所をと

ることが少なく、ルールも簡単で、しかし全身運動であるので、全盲者にとっても好適なスポーツ」であるということだ（文献5）。

1872年には学制が施行され、「人民一般必ス学ハスンハアルヘカラサルモノトス」（小学第21章）という国民皆学の理念のもと、障害児に対する教育の機運が高まった。

こうした背景を踏まえ、1878年、古河太四郎によって日本初の障害児教育施設である仮盲啞院（京都盲啞院）が設立される。古河は視覚障害児が運動不足ゆえに「一般に稍虚弱」であると指摘し、「盲人に適當の遊戲を奨め体操を課して愉快に運動喜戯せしむるは盲人体育上に最も必要」であると説いた（文献6）。すなわち子供たちに基礎的な体力と運動能力を与えることとともに、彼らが楽しめるように取り計らうことを重要視したのである。

この古河の意思は、当時の盲啞院のカリキュラムに如実に表れている。1880年に「体操科」が導入されるが、そこで教えられていたのは、鬼遊び（注1）や打毬聴音場（注2）など、比較的ゲーム性、娯楽性が高いものであった（文献7）。これらの授業内容を見ても、古河が現代で言うところのスポーツ選手のような人材を育成することは目指さず、むしろ視覚障害児たちが、大いに楽しみながら生活の基盤たる体力を身に付けることを願っていたことが伺える。

以上のような古河の体育教育は一種のモデルとして全国の盲学校に普及するが、必ずしも全面的に肯定的に受け入れられたわけではない。例えば樂善會訓盲院の創設者、大内青巒は古河の指導は盲学生を動物として扱っていると批判し、「自然的指導」を標榜した。すなわち晴眼学生を対象とする普通教育のカリキュラムを、盲学生用に数年遅らせる形でそのまま導入したのである（文献8）。

古河と大内、二人の教育理念上の対立は、盲学校における体育指導方法の熟成を呼び起こすばかりでなく、後の視覚障害スポーツ全体の基盤ともなるのである。

2. 1. 3 種目の整備と大会の開催

20世紀に入ると、体操科は基礎的な体力づくりから一步飛躍し、盲人野球や盲人蹴球、盲人卓球などに明確なルールを与えたうえで実践していく。近代スポーツ的な競技性の芽生えである。

その表れの一つとして、1914年には京都盲啞院にて運動会が催された。これは非常に限定的な規模ではあったが、視覚障害者によるスポーツ大会と呼びうる日本初の事例である（文献9）。そして近代スポーツへの接近という機運の高まりは、1925年、点字大阪毎日主催の第一回関西盲学生体育大会で一定の結実を見る（注3）。この大会には西日本を中心とした13の盲学校から138名の生徒が参加し、主に陸上競技で技能を競いあった。1928年には全日本盲学校体育連盟が結成され、連盟の引き継ぎにより大会は全国盲学生体育大会へと名を変え、より大々的に実施された。

ここで顧みられるべきは、単なる競技性の増大だけにとどまらない。盲学校では体育教育によって促される精神面での成長を重視するようになったのである。この変化を最

もよく表現しているのが、昭和初期の横浜訓盲院長、今村幾太の言葉である。今村は盲人野球のルール制定に奔走した人物であるが、彼は野球を通して以下の3つの徳が得られるとしている（文献10）。

- ①抵抗に対して強くなるが意地悪をしなくなる。
- ②事に失敗しても投げなくなり、また成功をもくろむようになる。
- ③他人と協調する姿勢が養われる。

スポーツを通しての人間的成長といったものは現在では当然の考え方であるが、それと同様のことが80年以上前の盲教育においても示唆されていたことになる。これは体力づくりを当面の目標としたカリキュラムと比較すると、大きな前進と言えるであろう。

2. 1. 4 戦前・戦時の体育教育

20世紀の半ばに近付くと、日本は帝国主義・軍国主義的性格を強めはじめる。当然ながらその影響は教育分野にも及び、ひいては盲教育にも余波を与える。その象徴的な事例の一つが国民学校令の公布（1941）である。これにより全国の盲学校に対して体操科の導入が義務付けられ、学生の身体鍛錬と精神鍛錬が企図された。ここでいう鍛錬とは前節で取り上げた競技性の向上や人間的成長とは性格を異にすると考えられる。というのも、身体鍛錬として課されるのは武道（特に柔道）であり、精神鍛錬として課されるのは日本的な作法や敬礼の仕方の学習だったからである。

全国の盲学校が体育教育の在り方の変更を余儀なくされたばかりでなく、戦争による物理的被害を被ったことは言を俟たない。実際、各都道府県の主要都市に位置することが多かった盲学校は、空爆の対象となり、終戦時には教育を行う土壌が半壊していた。したがって戦後の体育教育は一時的に停滞することとなる。しかし一方でGHQによる監視のもとで導入された近代的な教育制度が、盲教育に前進的に影響したことも認められる。その一つが1946年公布の日本国憲法において明文化された義務教育であり、視覚障害児たちは学校へ通う権利を容認された。ほかにもアメリカの盲体育が日本に紹介されるなど、欧米の方式を取り入れながら、新しい教育の土壌が建設されつつあった（文献11）。

2. 1. 5 戦後復興の時代

50年代の半ばから、日本は高度経済成長の時代へ突入する。この頃、各種スポーツはますます整備されていくこととなるが、一方で盲学校は生徒数の減少と経済負担の増大という問題に直面していた。その結果、盲学生によるスポーツ大会には中止へと追い込まれるものも現れた（文献12）。

こうした潮流に逆らう形で、1963年に各都道府県知事および指定都市市長あてに厚生省社会局長から以下の内容の通知が出された（文献13）。

「わが国においては、近年ようやく全国的に身体障害者スポーツ振興の気運が高まりつつあるが、まだ必ずしも十分な状態にあるとはいえないので、今後国としても身体障害者スポーツの振興を身体障害者更生援護

の一環として積極的に推進することとなった」（注 4）

このスポーツ奨励の背景には、1964 年に行われる予定であった東京オリンピック・パラリンピックの存在があったと思われる。特にオリンピックは戦後復興の象徴として、国家規模のプロジェクトでもって押し進められていた。それに伴い、東京パラリンピックを中心として視覚障害者スポーツが推進されるようになったと考えられる。

東京パラリンピックはオリンピックと同年に、国際大会としての第一部、国内大会としての第二部に分かれて開催された。第一部の競技選手は車いす競技者に限定されたが、第二部には視覚障害者の参加も認められた。さらに翌年には岐阜にて第一回全国身体障害者スポーツ大会が開催され、教育の一環でしかなかった盲体育が、スポーツとして確立されていくこととなる。

しかしこのある種の隆盛は、必ずしも視覚障害者スポーツがれっきとしたスポーツとして認められたことを意味しない点に注意せねばならない。1961 年制定のスポーツ振興法はその最たる例である。東京オリンピックを見据えて制定されたこの法においては、一般スポーツに関する規定が書かれはしたが、障害者スポーツに相当する事項については一切記述されなかった（文献 14）。さらにこのような障害者スポーツに対する理解の欠如は、大衆認識のレベルにおいても見受けられる。例えば当時の新聞では東京オリンピックをスポーツ紙面で大々的に扱う一方で、パラリンピックは社会福祉の話題として小さく纏められたにすぎなかった（注 5）。さらにその内容は、選手を「痛まし」い同情と憐みの対象として描くものであった（文献 15）。パラリンピックという名の知名度も、障害者スポーツの存在そのものも、一般に知られ、理解されるものではなかったのである。

2. 1. 6 世界の障害者スポーツの歴史

ここまでで、日本における視覚障害者スポーツが盲学校における体育教育に端を発し、東京パラリンピックの前後にスポーツとしての地位を確立しはじめたことが確認された。そこで補足的にはあるが、東京パラリンピックに至るまでの世界の障害者スポーツの歴史を概観し、その中で視覚障害者スポーツの位置付けを垣間見ることとする。

障害者が体系的・組織的に近代スポーツを始めたとされる最も古い事例は、1888 年のドイツ・ベルリンにおける聴覚障害者スポーツクラブの結成である。1924 年には国際聴覚障害者スポーツ協会がパリで結成され、9 カ国が参加するスポーツ大会が開催された。これは障害者が国際的にスポーツで競い合った初めての事例である。聴覚障害は他の障害よりも比較的運動に関する障壁が少ないため、独立したスポーツ組織の運営が早くから可能であったと考えられる。なお視覚障害者のスポーツ団体がヨーロッパで初めて生まれたのは、1928 年、ドイツにおいてである。

ヨーロッパでは日本と同時期、あるいはそれ以前に障害者スポーツが組織化されていたことになるが、両者における障害者スポーツの位置付けはやや異なる。日本では学校体育として始められた障害者スポーツは、ヨーロッパでは戦争負傷者のリハビリテーションの一環としての意味合いが強かったのだ。当時は視覚障害といっても、それが戦争

由来のものである場合、同時に四肢障害を負っている者も少なくなかった。したがってドイツやフランスの視覚障害者たちにとって基礎的な運動機能を回復・維持することは、日本の盲学生と比べてより困難であったと同時に、より必要なものでもあった（文献 16）。その課題を克服する方途としてスポーツを採用したことはなんら不自然なことではないであろう。

1948 年、イギリスのストーク・マンデビル病院にて、グットマン院長の進言により、脊髄損傷者のリハビリテーションとしてアーチェリー大会が開かれた。これは同年開催のロンドンオリンピックに焦点を当てたものであったことに注意されたい。参加者は一病院の患者だけという慎ましやかな大会ではあったが、グットマンの「失われたものを数えるな、残されたものを最大限に生かせ」という理念に基づき、4 年後には第一回国際ストーク・マンデビル大会と名を変えて大規模に実施された。その後も同大会は毎年開催されつづけ、1960 年にはローマオリンピックと並行する形で、第 9 回大会をローマにて執り行った。これが後に第一回パラリンピックと呼ばれることになる歴史的大会である（注 6）。

なおローマ大会の参加は車いす障害者に限定された。そのため視覚障害者がパラリンピックへの出場機会を得るのは、東京大会が初めてのこととなる。しかしこれも国内大会としての第二部に限定された話であり、いわば非公式の記録である。したがって視覚障害者の参加が公式で認められるのは、1976 年のトロント大会を待たねばならない。なお 63 年に世界歴戦者同盟主催で第 1 回国際身体障害者スポーツ大会が催され、日本から視覚障害者が 1 名参加している。

ローマパラリンピックと同年には身体障害者スポーツのためのワーキング・グループが結成。その 4 年後には同組織を母体として国際身体障害者スポーツ機構が設立されるなど、障害者スポーツを円滑に運営するための土壌が、日本と時を同じくして進められる。この機運は、1975 年の欧州評議会第一回ヨーロッパ・スポーツ閣僚会議にて提出された「みんなのスポーツ（Sports for All）憲章」において結実する。そこでは人種や階級といった区別によらず、基本的人権の名のもとにスポーツを楽しむ権利があらゆる人に対して認められた。これ以降、世界の障害者スポーツは、内部のネットワークを強化しながらも、外部に対して開かれたオープンな文化として展開されていくのである。

2. 2 中期——視覚障害者スポーツの普及と整備

2. 2. 1 スポーツ権の普及

70 年代の日本は、高度経済成長の恩恵と同時にその弊害を経験する。特にこの時期きわめて問題視されていた公害は、国民に権利という概念を呼び起こす契機となった。さらにこの権利の概念と健康志向の潮流は、スポーツ権という新たな概念の産出に繋がる。

スポーツ権とは、「身体形成、友人関係形成、精神的・感情的浄化、文化形成、そして社会統合等々を内包する文化」としてのスポーツに参加する自由権のことである。この

スポーツ権は、70年代から80年代にかけてアカデミックな場における概念的な議論の対象となり、次第に实际的な行政の分野にも波及していった（注7）（文献17）。したがって、この時代からスポーツを行うための空間的、時間的、社会的な環境整備が行われるようになる。日本のスポーツ福祉国家に向けての一つの歩みとも言えよう。

2. 2. 2 障害者スポーツセンターの設立

障害者のスポーツ参加を保障する、あるいはそれを促すことを目的として、1974年、大阪に障害者スポーツセンター（現大阪市長居障がい者スポーツセンター）が設立された。これが日本で初めての障害者向けの公共運動施設である。当施設は「いつ一人で来館しても指導員や仲間がいて、安心していろいろなスポーツを楽しむことができる」という方針のもと、時に地域の憩いの場として、時に激しく腕を競い合う場として機能した（文献18）。

この大阪の事例が先駆けとなり、日本全国で障害者スポーツセンター建設の機運が高まる。80年代までにおよそ90の施設が設立され、現存する障害者運動施設全体の8割近くがこの時期に開創されたことになる（文献19）。1984年には各施設の意見交換および運営統治の場として身体障害者スポーツセンター協議会が発足。まさにスポーツ権が保障する「スポーツを行うための空間的条件」がこの時期に整えられていくのである。

2. 2. 3 障害者スポーツ団体の結成

日本における視覚障害者スポーツにまつわる初めての団体は、1928年の全日本盲学校体育連盟であることは前に確認した。それ以降、何かしらの団体が競技や大会を組織的に運営する例はあまり見られなかったが、日本身体障害者スポーツ協会の発足（1965）を皮切りに、様々な団体が設立され、各競技の自治を行い始める。また同様に地方の障害者スポーツ団体の設置も全国各地で開始された。その機運が加速を見せるのがまさに70年代に入ってからであり（下表参照）、ここに「スポーツを行うための社会的条件」の整備の一端を見出すことができるだろう。

設立年	団体名	設立年	団体名
1965	日本身体障害者スポーツ協会	1994	日本ゴールボール協会
1971	京都障害者スポーツ振興会	1994	日本視覚障害ゴルフフェーズ協会
1972	日本身体障害者スキー協会	1995	日本障害者カヌー協会
1983	日本盲人マラソン協会	1996	日本視覚障害者セーリング協会
1985	日本盲人連合会スポーツ競技会	1998	全日本グランドソフトボール連盟
1986	日本視覚障害者柔道連盟	1998	日本視覚障害者卓球連盟
1988	日本パラ陸上競技連盟	1998	日本フロアバレーボール連盟
1989	種目別競技団体協議会	1999	日本トライアスロン連合
1990	日本パラサイクリング連盟	2002	日本ブラインドサッカー協会
1990	日本ブラインドテニス連盟	2004	全日本視覚障害者ボウリング協会

表：1965年以降設立の主な視覚障害者スポーツ関連団体（文献20、21）

2. 3 後期——障害者スポーツの競技化

2. 3. 1 2度目の国内パラリンピック

90年代の日本は、国内障害者スポーツ史上最大ともいえる大転換を経験する。ほかでもないパラリンピック長野大会（1998）である。ヨーロッパ圏外では初めての冬季大会となる長野パラリンピックは、1991年にその開催が決定し、障害者スポーツ全体の立ち位置を大きく押し上げるきっかけとなった。

長野パラリンピックが与えた影響として最も目を見張るべきは、障害者スポーツの競技指向性の増大である（注8）。東京パラリンピックでは、競技における近代スポーツ的な性格がある程度強くなったが、競技のレベルから見ても、大衆意識から見ても、それは福祉としての扱いから脱却できているとは言い難かった。しかし長野大会の開催が決まると、そのような福祉的側面は排除され、勝利することを目的とする選手強化が徹底されるようになる。

代表的な事例は、91年から始まったジャパンパラリンピック競技大会（現ジャパンパラ大会）である。第1回大会では陸上、水泳競技のみが採用されたが、93年からはスキーとアイススレッジの大会が催されるようになった。本大会は、世界大会出場を狙う国内選手のための大会として位置付けられ、選手の強化、育成に貢献した。さらに同じ時期には、定期的に障害者スポーツ指導者の研修が行われ、適切な指導法の構築が目指された。

こうした育成計画が実り、長野大会で日本は合計41個のメダルを獲得するという躍進を遂げた。なお日本代表の視覚障害者選手は5人出場し、バイアスロンで1個の金メダルを獲得している（文献22）。

2. 3. 2 障害者スポーツへの意識の変化

長野パラリンピックは、障害者スポーツの競技性を促進したが、さらにそれに対する国民の目線をも大きく変容させた。その象徴が新聞における報道の仕方である。

東京パラリンピックの際には、大会は社会福祉の面で同情的に報道されたと前に記したが、長野ではスポーツ紙面で連日大会の様子を報じた。内容的にもオリンピックを描くのとほぼ同等の仕方をもって、選手たちの活躍を描写した。加えて記事の数においても東京と長野ではきわめて大きな差が見受けられる。主要新聞社が1964年に報じた東京パラリンピック関連の記事の総数は170件であったのに対し、1998年における長野パラリンピック関連の記事の総数は1769件であり、10倍以上増大したことが分かる（文献23、24、25）。

さらに長野パラリンピックを特集した雑誌において、スポーツ科学者である矢部は、アダプテッド・スポーツ（注9）の概念を提唱し、障害者スポーツがリハビリテーションの域を完全に脱したと明言している。そして障害者アスリートの中に競技で勝つためにドーピングをする者や、大会の賞金や広告料で生計を立てる者も現れていることを指摘したうえで、「障害者の競技スポーツは健常者のスポーツやオリンピックと何ら変わるも

のではない」とまで言ってみせた（文献 26）。

また障害者スポーツの大衆レベルでの普及という点では、障害者スポーツ専門雑誌の登場にも目を遣るべきである。95 年には『アクティブ・ジャパン』と『ぱりあふりー』の 2 誌が創刊され、国民の障害者スポーツへの関心を高めた。

当然ながら、長野パラリンピックを機に障害者スポーツが健常者のスポーツと全く同じ土俵に立ったと考えるのは早計である。人気、知名度、いずれをとってもオリンピックはパラリンピックを上回っており、後者が前者の陰に隠れていた面も否めない。しかしながら競技の質および国民の意識の 2 点における障害者スポーツの根本的、近代的な土壌が、98 年の長野大会によって形成されたと言っても、決して過言ではないであろう。

2. 3. 3 運営組織の体系化

前述の通り、視覚障害者スポーツの関連団体は、70 年代以降、加速度的に設立が進んだ。その流れは 90 年代にピークを迎え、長野パラリンピックの時期に成熟へと至る。これらの団体は、独立して競技の整備や大会の開催を行ってきた面が強い。しかし 99 年に日本パラリンピック委員会と日本障害者スポーツ協会が発足すると、視覚障害の各種競技のみならず身体障害、知的障害、精神障害の 3 障害の競技が一元化の傾向を見せる。さらに日本障害者スポーツ協会は、2000 年に日本体育協会に加盟し、一元的な上からの管理のもと、ますます健常者のスポーツに接近した競技的性格を備えていくのである。

3. 視覚障害者スポーツの現状

第 2 章では、20 世紀までの視覚障害者スポーツの歴史の概要を見た。続いて本章では、第 2 章の流れを受けつつ、21 世紀、すなわち現在の視覚障害者スポーツの様態を概観する。といっても、扱うべき事柄の範疇は非常に広範であり、個別的、具体的な内容に踏み込むことは困難を極める。したがってここでは大局的、場合によっては抽象的な見方を取るに留めたい。

現代の障害者スポーツは、以下の 3 つの意義を含む複合的な概念として理解されている（文献 27）。

- ①リハビリテーションスポーツ
- ②生涯スポーツ（市民スポーツ）
- ③競技スポーツ

スポーツの実施は、視覚能力の回復そのものに直接的に貢献しない（注 10）ため、視覚障害においては①と②を同様の意義として扱ってよいだろう。したがってここでは競技スポーツと市民スポーツ、2 つの側面から視覚障害者スポーツを取り上げ、最後に全体的な傾向を見ることとする。

3. 1 競技化の現状

視覚障害者スポーツは、時代を経るにつれて近代スポーツ的競技的性格を深化させていった。では現在ではどのように競技選手の育成が図られているのだろうか。以下、主に 2015

年の文部科学省の資料（文献 28）に基づきながら検討する。

3. 1. 1 予算の配当

アスリートの競技力向上には、洗練されたトレーニング、整備された施設、遠征など、十全な環境を用意することが不可欠である。そのためには選手当人の努力の域を超え、国や協会が経済的援助を手配することが求められる（注 11）。本節では、そうした予算の観点から障害者スポーツを見ることとする。

資料によると、2015 年度の障害者スポーツに対して割り当てられた予算は、総額でおよそ 17 億円。同年の文科省のスポーツ関係予算が 255 億円であったことを考慮すると、スポーツ全体のうち、約 15 分の 1 が障害者スポーツに配当されていることになる。さらに来年度からは 1.5 倍に拡充して計上され、21 億円以上が選手の競技力育成費用として充てられることになっている。またこれまではどの選手、競技にも均等に予算を配分していたが、次年度からは実力のある有望な選手に対して重点的に予算を割く方針が定められた（文献 29）。

以上の事例を鑑みると、今後の障害者スポーツ、特に東京パラリンピックを見据えた強化戦略が既に進められていると言えよう。しかし文科省は来年度のスポーツ予算として 500 億円近くを要求しており（文献 30）、それと比較すると限定的な運営の仕方であるとも見ることができる。障害者スポーツという競技の新しさ、および練習、競技におけるガイドや特殊な機器といった障害者スポーツならではの需要を捕捉した予算勘案が期待されるところである。

3. 1. 2 指導者の位置づけ

アスリートの質を高めるには、その質に見合う能力を持った指導者の存在が不可欠である。とりわけ視覚障害者のスポーツ指導においては、目の見えない、あるいは見えにくいという状況の把握に基づく適切な指導法を身に着けることが求められる。そこで日本障がい者スポーツ協会は、障害者スポーツ指導者の公認制度を設け、その熟練度に応じて初級、中級、上級、コーチの 4 つの級位を与えている。初級指導員の資格を持つ者は、全国に 2 万人弱の人数を誇り、身近な障害者にスポーツの生活化を進める役目を担っている。一方スポーツコーチは 139 名存在しており、パラリンピック選手団などに在籍し、世界レベルのトップアスリートを育成することを目標とされている。このように資格の範疇を幅広く認めることで、地域レベルでの障害者スポーツの奨励からメダリストの育成に至るまで、柔軟な射程を備えた指導が可能となっている。

しかし資格保持者の人数は 20 年前から急速に増大したものの、ここ 10 年は伸び悩んでおり、やや頭打ちの感が見受けられる。また指導者としての実際の活動頻度を見てみると、まったく行わない、あるいは年に数回という人の割合が過半数である。特に初級指導員にはその傾向が顕著であるため、資格が持つ意味そのものが希薄になりうる懸念も及んでいる。

3. 2 市民スポーツの現状

障害者スポーツの歴史は、競技化の傾向によって特徴づけられるが、70年代以降、市民スポーツやレクリエーションと呼ばれるような、日常的運動を行うための環境が整備されてきた面も忘れてはならない。本節では、2013年度に行われた報告（文献31）に基づきつつ、視覚障害者の普段の運動実施状況を概観する。

3. 2. 1 スポーツの障壁

報告によると、過去1年間にスポーツ・レクリエーションを行った視覚障害者の割合は43パーセントとなった。一般成人に対する調査では74.4パーセントという数字が出ており、視覚障害を理由に運動を行わない（行えない）人が多いことが分かる。また他の障害と比較すると、肢体不自由者より実施割合が高く、聴覚障害、知的障害より低くなっている。

視覚障害の運動実施者が、運動を行う際の障壁として挙げている上位3つは「金銭的な余裕がない」、「体力がない」、「時間がない」というもので、これらはとりわけ視覚障害に特有のものではないと思われる。しかし続く障壁として「交通手段・移動手段がない」、「仲間がいない」ことが挙げられている。別の研究では、視覚障害であることを理由にスポーツ施設から利用を断られたケースも報告されており（文献32）、いまだスポーツを行う環境が十分に整備されてはいないことが示唆されている。また運動の非実施者は、「スポーツ・レクリエーションが苦手である」ということのほかに、自分の障害に適したスポーツがないとも答えている。

3. 2. 2 スポーツの内容

では視覚障害者は実際にどのようなスポーツ・レクリエーションを行っているのだろうか。報告によると、実施人数の多い種目は、ウォーキング、散歩、体操、筋力トレーニングといった、いわゆる健康志向の軽運動であった。続いて海水浴や釣りなどのレクリエーションも上位に来ている。ルールが明確な競技スポーツでは、柔道、野球、ボウリングなどが人気であるが、いずれも全体で見ると実施割合は少ない。

運動を行う理由としては、健康維持とストレス解消とが過半数を占めている。リハビリテーションは7.6パーセント、目標や記録への挑戦は3.3パーセントに留まった。

以上の結果を見ても、専門的競技に専念している視覚障害者は非常に限定的であり、晴眼者と同様、スポーツをレクリエーションの一環として実践している人が大半であることが伺える。

3. 3 視覚障害者スポーツのいま

3. 3. 1 視覚障害者スポーツへの意識

障害者スポーツへの大衆意識は、初めは同情の対象という認識範囲に収まっていたが、その競技性指向に伴って次第に変化してきた。そして現在の人々の意識を象徴的に表したのが、2012年のロンドンパラリンピックである。

ロンドン大会では、270 万枚もの観戦チケットが完売し、連日競技の様子がテレビ中継されるなど、一般市民の間で大きな盛り上がりを見せ、パラリンピック史上最も成功した大会となった。その原因としては、チケット価格がオリンピックの 10 分の 1 であったという事態もあるが、同時に地元の啓発事業が果たした役割も大きい。例えば元イングランド代表のフットボール選手、デイヴィッド・ベッカムをアンバサダーとして起用したり、公共テレビ局の CM で障害者スポーツを「かっこいい」ものとしてアピールするなど、積極的にイメージ向上に努めた。このような努力のもとに、パラリンピック発祥の地（注 12）、イギリスにおいて障害者スポーツへの関心が飛躍的に高められたのである（文献 33）。

一方の日本はどうであろうか。日本人で「パラリンピック」という語を聞いたことがある人は 98 パーセントと世界トップであったにもかかわらず、パラリンピックの障害や競技を十分に理解している人は 0.5 パーセントという結果が出ている（文献 34）。また「障害者スポーツ＝車いすスポーツ」という認識が国内で強いという指摘がなされており（文献 35）、実際、観戦経験のある障害者スポーツの 1 位と 2 位はそれぞれ車いすテニスと車いすバスケットボールであった。この要因としては、車いす競技の実績とメディアでの扱いが考えられる。しかしながら、こと視覚障害に焦点を当てると、これは偏ったスポーツ観であると言わざるを得ない。幸い、同じ調査では、東京パラリンピックの中継を見たいと答えた割合は、東京オリンピックのそれを上回っている。実地での観戦を望んでいない点ではやや消極的かもしれないが、2020 年に視覚障害者スポーツへの理解が高まることを期待したい。

3. 3. 2 インクルーシブ化へ

最後に、現代の障害者スポーツを特徴づける「インクルーシブ・スポーツ」の概念を紹介したい。インクルーシブ・スポーツとは、端的に言えば、障害者と健常者が一緒に楽しむスポーツのことである。中村は、これを 1990 年代にフランスで発祥したソーシャル・インクルージョンの一環として捉え、障害者に社会とのつながりを実感させ、孤立を回避させる効果を持つと指摘している（文献 36）。

中村によると、インクルーシブ・スポーツには以下の 2 種類が存在する。

- ①障害者スポーツに健常者を組み込む
- ②一般スポーツに障害者を組み込む

視覚障害者スポーツにおいては、①の例は非常に考えやすい。というのも、アイマスクをすれば、晴眼、弱視、全盲が同じ条件のもとに置かれるからである。実際、ブラインドサッカーでは、フィールドプレイヤーはアイマスクを付けてプレーする規定となっている。ブラインドサッカー日本代表の加藤健人選手は、「障害者も健常者も一緒にできるのが魅力」と語り、競技の啓発を行っている（文献 37）。しかしアイマスクの装着だけで試合的に対等になれると本当に言えるのか、視覚障害に対する安易な理解を導きはしないか、常に入念に注意する必要があるだろう。

一方の②に関しては、マラソンが最たる例として挙げられる。国内では2002年に日本陸上競技連盟が、視覚障害者のガイドランナーを伴ってのマラソン参加を認めた。これにより弱視者も全盲者も一般の大会に参加することが可能となったのである。ここで注意すべきは、ガイドランナーのようないわゆる補助をどこまで認めるかという問題である。過去のオリンピックの陸上競技では、義足ランナーの可否が議論されたことがある。行き過ぎた補助は助力とみなされ、競技のバランスを欠くことに繋がる。補助と助力の線引きが、今後ますます取り上げられることになるかもしれない。

無論、インクルーシブ・スポーツは、絶対的に肯定される概念ではない。しかし障害者と健常者が一体となって競技を行う経験は、障害者スポーツの理解と発展を促進する契機となりうるものである。その意味で、このインクルーシブ化とでも呼ぶべき現象によって、今日の視覚障害者スポーツは、ますます外に対して開かれた体系へと方向付けられていると言えるだろう。

4. まとめと感想

ここまでで現代にいたるまでの視覚障害者スポーツ史を概観した。日本の視覚障害者スポーツは、盲学校体育に端を発し、第二次大戦後の高度経済成長と東京パラリンピックをきっかけとして環境整備と競技化が進められた。そして長野パラリンピックの前後にその機運が急速に高められ、今日ではアスリートでない障害者、あるいは健常者へと向けられた開放性を模索しながら、一般スポーツと相変わらぬ地位を築きつつある。

さて、本研究を仕上げるにあたって、下記参考文献表に記載した諸先行研究を参照させてもらった。いずれもが視覚障害者スポーツ理解に有益なものばかりであったが、黎明期の盲「体育」から近代的な「スポーツ」に至るまでを俯瞰する研究は非常に限られており、そこに本研究のやりがいを見出すことができた。しかし未だ課題は山積している。例えば日本と諸外国、あるいは障害者スポーツと一般スポーツの比較検討を通せば、さらに明確に視覚障害者スポーツの輪郭を浮き彫りにすることができるのではないかと思う。また別の問題として、特に70年代以降の内容において、障害者スポーツ全体から視覚障害を抽出して語ることが難しかった面が否めない。視覚障害と他の障害とを比較して相対化する試みを今後追及していきたいところである。

ところで、通史全体から受ける漠然とした印象であるが、障害者スポーツは、いわゆる一般スポーツと同じ層に位置することか、ややもすると、それと一体化することを目指しているように感じる。しかしノーマライゼーションの観点から一旦身を置いて、障害者スポーツならではの在り方を模索するのも一つの可能な選択なのではないだろうか。スポーツとは、制限されたルールのもとで、人間の身体能力に挑戦することにほかならない。とすれば、普段視覚を用いていない人間だからこそ追求できる領域があるかもしれないし、そういった領域を作り出すことは決して難しくはないはずである。

障害に対する「無差別」と「統合」が並列して語られるようになって久しいが、ことス

スポーツに関しては、障害者スポーツが一般のスポーツから差別化された一つの独立した体系として自信を持って存在できる、そのような環境づくりがあっても良いような気がしてならない。当然その次元に達するためには、障害者スポーツの質、知名度、人気、信頼、その他あらゆる面での向上と改善が求められる。

2020 年、日本は夏季パラリンピックを複数回開催した経験を持つ唯一の国となる。冬季長野大会を含めたらなんと 3 度目である。過去に培った経験を生かしながら、ロンドン大会を超える成功を収め、視覚障害者スポーツの歴史にとって飛躍の年になることを期待したい。

注釈

- 1) 鬼を一人決め、その鬼を複数の生徒で円状に囲む。囲んだ生徒が声を挙げ、それを聞いた鬼が、周囲の生徒が円の内側を向いているか、外側を向いているかを当てるゲーム。声や音の方向感覚を掴む訓練となる。
- 2) 毬を手で投げて、前方にある複数の的のいずれかに当てるゲーム。見事命中させると、的の種類に応じて異なる音が鳴る仕組みになっている。対象との距離感を掴む訓練となる。
- 3) 体育大会が点字新聞社の主催によるものであることは、注目に値する。ここに 19 世紀の終わりに普及した日本訓盲点字の影響を見ることができるからである。
- 4) 視覚障害は一般に情報障害に分類されるが、障害者スポーツの文脈では精神障害との対比関係を意識して身体障害に分類されることが少なくない。
- 5) 1964 年 11 月 13 日の読売新聞朝刊は、東京パラリンピックを「百万人の日本の身障者に勇気と自信を与え、社会復帰への希望を植えつけてくれた」存在として捉えている。また 1964 年 11 月 14 日の朝日新聞東京紙夕刊の天声人語では、パラリンピック競技が「勝つことが目的ではない」ものとして当然のように位置づけられている。
- 6) 「パラリンピック(Paralympic)」という名前は、1964 年の東京大会の愛称として考案された。当時の出場者は脊髄麻痺者が多くを占めていたため、これは「麻痺」を表す「パラプレジア(paraplegia)」と「オリンピック(Olympic)」を掛け合わせた造語である。公式の名称となるのは 88 年のソウル大会からであり、この時に「パラ」を「平行(parallel)」として解釈するようになった。
- 7) しかし 80 年代以降はバブル経済の崩壊と新自由主義の到来により、スポーツ権の議論は衰え、否定的な見方も強まるようになる。
- 8) 海外に目を向けると、競技性指向の背景には 89 年の国際パラリンピック委員会設立があることが分かる。この頃からパラリンピックの出場水準が厳しくなり、日本もこうした国際的動向に対応した戦略を強いられたものと考えられる。
- 9) 障害者に限らず、高齢者、女性、子どもなど、各々の身体状況に適応(adopt)させたスポーツのこと。

- 10) 西田は、特に弱視者や中途失明者に対して、スポーツをリハビリテーションの一環として推奨している（文献 38）。精神面や体力面からすると、視覚障害者スポーツがリハビリテーションの意義をまったく持たないとは言えない。
- 11) スポーツ振興の予算と国際大会における結果との間には、必ずしも厳密な相関関係は存在しない。参考文献 28 を参照のこと。
- 12) ロンドンパラリンピックの聖火リレーは、ストーク・マンデビル病院付近の競技場からスタートした。このことから見ても、イギリスにパラリンピックの始祖としての意識が強く残っていたことが分かる。

参考文献

- 1) 陶山哲夫「障害者スポーツが世界を広げる」『脊髄損傷者の社会参加マニュアル』にほん脊髄基金、2008 年、121-130 ページ
- 2) 世界盲人百科事典編集委員会編『世界盲人百科事典』日本図書センター、2004 年、25-30 ページ
- 3) 北野与一『日本心身障害者体育史』不昧堂出版、1996 年、18 ページ
- 4) 加藤博志『視覚障害者のスポーツ——改訂版』福祉図書出版、1988 年、7-8 ページ
- 5) 世界盲人百科事典編集委員会前掲書、169 ページ
- 6) 北野前掲書、23 ページ
- 7) 鈴木力二編『図説盲教育史事典』日本図書センター、1985 年、148 ページ
- 8) 北野前掲書、31-32 ページ
- 9) 北野前掲書、49 ページ
- 10) 鈴木前掲書、149 ページ
- 11) 北野前掲書、98-99 ページ
- 12) 藤田紀昭『障害者スポーツの環境と可能性』創文企画、2013 年、29 ページ
- 13) 鈴木前掲書、151 ページ
- 14) 日本スポーツ法学会編『詳解スポーツ基本法』成文堂、2011 年、86-87 ページ
- 15) 朝日新聞 1964 年 11 月 12 日東京紙夕刊、8 ページ
- 16) 世界盲人百科事典編集委員会前掲書、156 ページ
- 17) 内海和雄『日本のスポーツ・フォー・オール—未熟な福祉国家のスポーツ政策—』不昧堂出版、2005 年、70-74 ページ
- 18) 大阪市長居障がい者スポーツセンターパンフレット（2015 年 11 月 7 日閲覧）
<http://www.fukspo.org/nagaissc/pdf/140604pamphlet.pdf>
- 19) 藤田前掲書、45 ページ
- 20) 藤田前掲書、42-43 ページ
- 21) 日本障がい者スポーツ協会『障がい者スポーツの歴史と現状』（2015 年 11 月 7 日閲覧）
http://www.jsad.or.jp/about/pdf/jsad_ss_2015_web_150410.pdf

- 22) 厚生労働省 長野パラリンピック冬季競技大会（2015 年 11 月 7 日閲覧）
<http://www1.mhlw.go.jp/topics/nagano-p/tp0506-1.html>
- 23) 毎日新聞 毎索（2015 年 10 月 31 日閲覧）
<http://mainichi.jp/contents/edu/maisaku/>
- 24) 読売新聞 ヨミダス歴史館（2015 年 10 月 31 日閲覧）
<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>
- 25) 朝日新聞 聞蔵Ⅱビジュアル（2015 年 10 月 31 日閲覧）
<https://database.asahi.com/library2/>
- 26) 矢部京之助「アダプテッド・スポーツの提言」『ノーマライゼーション：障害者の福祉』
第 17 巻第 12 号、日本障害者リハビリテーション協会、1997 年、17-19 ページ
- 27) 陶山哲夫「総論：障害者の権利とスポーツの世界的潮流」『臨床スポーツ医学』Vol.25No.6、
文光堂、2008 年、565-567 ページ
- 28) 文部科学省『障害者スポーツに関する基礎資料集』（2015 年 11 月 7 日閲覧）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/027/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2015/06/15/1358884_09.pdf
- 29) 読売新聞 2015 年 10 月 5 日東京紙朝刊、1 ページ
- 30) 文部科学省『スポーツ関係予算について』（2015 年 11 月 8 日閲覧）
<http://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/kihon5/1kai/sanko6-13.pdf>
- 31) 文部科学省『地域における障害者のスポーツ・レクリエーション活動に関する調査研究
報告書（平成 25 年度）』（2015 年 11 月 13 日閲覧）
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/suishin/1347306.htm
- 32) 香田泰子、天野和彦「社会人視覚障害者におけるスポーツ活動の現状について」『筑波
技術大学テクノレポート』Vol.14、筑波技術大学学術・社会貢献推進委員会、2007 年、
219-222 ページ
- 33) 河野純一「視覚障害者スポーツの今——第 2 回 パラリンピックの価値と現状」『視覚
障害——その研究と情報』No.323、障害者団体定期刊行物協会、2015 年、24-31 ページ
- 34) 日本財団パラリンピック研究会『国内外一般社会でのパラリンピックに関する認知と関
心 調査結果報告』（2015 年 11 月 14 日閲覧）<http://para.tokyo/2014/11/survey.html>
- 35) 佐藤成定「障害者ゴルフ——「障害者ゴルフ＝車いすゴルフ」ではない」『総合リハビ
リテーション』Vol.36No.9、医学書院、2008 年、844-845 ページ
- 36) 中村太郎「地域に密着したインクルーシブ・スポーツ活動——サッカーと卓球バレーの
取り組みから」『臨床スポーツ医学』Vol.25No.6、文光堂、2008 年、615-618 ページ
- 37) 読売新聞 2015 年 3 月 6 日東京紙朝刊、29 ページ
- 38) 西田朋美「眼科における視覚障がい者スポーツの現状と課題」『視覚障害——その研究
と情報』No.318、障害者団体定期刊行物協会、2014 年、35-42 ページ